黒刀の所有者

hurosuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒刀の所有者

【Ｎコード】
Ｎ６６４９Ｉ

【作者名】
ｈｕｒｏｓｕｔｏ

【あらすじ】
「望みを叶えたいのなら戦え。我を手に取り代価を払いそして斬れ。」
これは運命だったのか。それとも必然だったのか。少年は黒刀を手に取り代価を払ってしまう。
それから八年後、美しい自然に囲まれた国オスティアは同盟を結んでいたはずの隣国グリア帝国によって滅ばされてしまう。

そんな中、オスティア王女セフィリアは黒い刀を持つ謎の男に出会う。

プロローグ

灰色の空。雨が降り、雷が鳴る、そんな土砂降りの中を一人の少年は走る。

一生懸命、森の中をただ走る。

どんなにずぶ濡れになっても――。

何回こけても血が出ても――。

ただ、ひたすら走る。

しばらくして少年の目に、洞窟が映る。

そこを初めから目指していたのだろう、彼はその洞窟に入る。

洞窟の中は一定の距離で松明（たいまつ）で灯してあったため、明るい。

しかし、たとえこれが無くても彼にとってはどうでもいいのだろう。

ただ、目の前を見てどんなに苦しくても、どんなに辛くても、

彼は走るのを止めない。いや、止められないのだろう。
身体よりも頭のほうが働いているためか、ただ一心にある決意…というよりは覚悟をして彼はこの奥を目指しているのだ。

少年はただがむしゃらに走る、走る、走る――。
それはまるで、少年は立ち止まることを知らないかのように。

走り抜けたその先には、広い空間に辿り着く。

そこにはいくつもの剣が地面に突き刺さっており、まるで剣の墓場みたいな場所だった。

その剣の中心に辺りの剣より明らかに異なっている刀があった。
周りの剣とは違い、鞘と柄が黒く禍々しい雰囲気が出ていた。

しかし、少年はそんなことに無頓着で右手で乱暴に柄を掴み、地面から抜き取る。

（不気味な刀だ。でもこれさえあれば、僕は――）

少年はその黒刀をじっくりと見ながらそう思った。

自分のために、あるいは誰かのために使うつもりなのだろう。

彼の目的は分からなかった。

そして、振り返りこの場から去ろうとしたそのとき、

――お前が新しい所有者か。

少年は驚く。辺りを見渡しても誰もいない。人が隠れる場所すらない。

気のせいか。そう思った少年はまた歩こうとするがまた、

――哀れなことだ。その歳で我の所有者とはな。

また辺りを見渡す。が何処にも見当たらない。

すると今度は自分の右手にある黒刀を見る。

気が付くと黒刀から黒い気体、霧のようなものがその黒刀全体からあふれ出てくる。

少年は怖くなり、その刀を手放そうとするがどうしてか、少年の右手は動かない。どんなに動かそうとしても全くビクともしない。

――無駄だ。お主はもう我の新しい所有者になったんだ。喜べ、お主の願いは、欲望は、我の力で全てうまくいくぞ。

今度ははっきりと分かる。明らかにこの黒刀が少年に話しかけているのがよく分かった。

少年の顔はだんだん青ざめていく。体の震えが止まらなくなる。

（いやだ、いやだ、いやだいやだいやだいやだいやだいやだ！！だれか助けて！！）

――安心しろ。お主は別に死んだりはしない。体にも何も起こらない。だだし、

黒刀から出る言葉が、少年の頭の中に入っていく。一体何が起こるのか、全く検討がつかない。

――お主が望むことがあるならば、それに対しての代償、対価が必要だ。

（た、対価……？）

――ああ、そうだ。例えば、今お主が望んでいることがあるんだろう？我を欲した理由が。

少年は驚いた。この黒刀はどうやら少年の考えていることが読めるようだったからだ。

――さぁ、願え。欲張れ。お主には願いがあるのだろう？だったら、今すぐ我に願え。

少年には、理由があった。この黒刀を欲する理由が。だから少年は願った。

自分に何が起こってもいい。ただそれで彼女を助けられるなら。守

れるなら。

――そう、それでいい。これで我とお主の間に契約が交わされた。これでお主の願いは叶うぞ。喜ぶがいい。

黒刀から出てくる黒い霧のようなものが少年の体を全身、包み込んでいく。

その中で少年は思った。覚悟した。悔いの残らないように。

この世界でたった一人、こんな自分と仲良くしてくれた人、対等に見てくれた人に対して最後に思った。

自分の意識があるうちに。

（今までありがとう。そして、さようなら、セフィリア……）

そして彼の目から一筋の涙が流れた後、それを最後に少年の意識は遠退いきその場で倒れた。右手には黒刀を掴んだままで。

洞窟の外はまだ雷雨が止まなかった――。

第一章　忍び寄る影

ヴァード大陸。

この大陸に五国在り。

美しい大自然が特徴的な国　オスティア王国。

ヴァード大陸一国土を持つ国　グリア帝国。

神への信仰を第一とする宗教国家　コーデリア聖国。

広大な砂漠が広がる国　アルハナ王国。

年中止むことのない雪が吹雪く雪山に聳(そび)え立つ孤高の国　スヴェナ帝国。

何百年も前まで、この五国は各地で争いを起こしていた。

しかし、グリア帝国から突然の戦争放棄の提案が各国に持ち込まれた。

初めは各国疑心暗鬼であったが、時間が経過するにつれて、スヴェナ帝国以外の国家が武力を少しづつ解いていった。

そして、この後何百年か経過し各国の軍隊は未だ放棄されてはいなかったが、各国休戦状態となっていた。

そしてグリア帝国はオスティア王国に平和同盟を持ちかけた。

この提案を素直に受け入れたオスティア王国はグリア帝国と同盟。
このまま、五国は完全なる平和へと歩んでいけるはずだった……

「ねーウィル。今日からわたしたち友達にならない？」

ウィルに会って間もないときに、幼い頃の私は彼にそう言った。
ウィルは私と同い年で、背は私より少し小さく、髪の毛は栗色だった。

「ひ、姫様！そ、それは出来ません。私は姫様の直属の部下であるようにと姫様のお父上、国王陛下様に頼まれているんですから！」
ウィルは戸惑いながら私に言った。
「あら？いいじゃない、別にそんなこと。私とウィル、ちょうど同い年なんだし」

「で、ですが、、」

「それとも、私のこと嫌いなの……？」

「そんなこと決してありません！」

「じゃあ、別に問題ないわよね？」

「そ、それでも、僕の父上と国王陛下様が許すはずがありません……」

俯きながら言ったウィル。

「――私には親しい友達がいないの」

「えっ？」

たまらずその言葉に反応し、顔を上げるウィル。

「お父様は毎日国の仕事で私のこと構ってくれないし、お母様は私が生まれるときに死んじゃった。他の人は皆、私よりもずっと年が離れているのに私のことを「姫様」で本当の名前を呼ばれたこと無いから。だから、せめて同い年のあなただけでも私のこと名前で呼んではくれないの？」

「姫様。しかし、僕なんかにはとても――」

「じゃあ、命令。私の友達になって。それで私のこと名前で言って」

あっさりとウィルに言った。

「・・・　・・・やっぱり姫様には敵いません。けど、二つほど条件があります」

「条件？何、条件って。言ってみて」

「一つ目は姫様と二人でいる時だけお名前で呼ばせてもらうことです」

「……しょうがないわね。いいわ、それぐらい我慢してあげる。二つ目は？」

「二つ目は、友達とは命令でつくるものではありません。気が付いたらなっているものです。姫様が僕のことを友達だと思って下さるのならその時からが友達です。このことをずっと覚えていてください」

「ん～。よく分かんない。けど、友達になってくれるならなんでもいいわ。じゃあ今日から私たち友達よ」

「はい、姫様」

「……ウィル、さっきまでの話ちゃんと聞いてたの？」

「あ、すみません。では、セフィリア様、でよろしいですか？」

「普通友達なら、敬語なんて使わないわ。もう一回」

「で、では、・・・よ、よよよろしく、、、セ、、セセセ、、、、

セフィリア、、、」

「あら、やれば出来るじゃない。じゃあ二人でいるときはいつもそう呼びなさい。ウィル」

「分かりました――じゃなかった。えっと、わ、分かっ、たよ」

「・・・　・・・まだぎこちないけど、まぁいつかは慣れるわよね」

これがウィルこと、ウィリアム・ハーゲンとの幼い頃の約束だった。

この会話から一ヶ月後に彼は私の前から姿を消した。

オスティア　オスティア城内――。

「姫様ー。朝でございますよー」

ドアをノックする音が聞こえる。

その音にたまらずに起きたセフィリア。

（懐かしい夢を見ていたのに一体なにごとよ……）

眠たい目を擦りながら、体を起こす。

「はいはい。今行くから待ってなさい。」

扉を開けてみるとそこには一人のメイド、ローラが立っていた。

「あっ、姫様おはようございます。さっさ、朝ですから着替えて下さい。私も手伝いますから」

そう言ってローラはセフィリアの部屋に入り、着替えが入っている

棚を開け着替えを探す。

「姫様、寝癖が出来てますよ。私が着替えを探している間に直して下さいな」

そう言われて鏡を見るセフィリア。たしかにすごい寝癖だった。印象的な金色の長い髪がぐしゃぐしゃだった。

「今日って、なんかあったっけ？」

鏡を見ながら寝癖を直しながらローラに言う。

「いえ、特に何もありませんよ」

「そう。じゃあ今日は暇ね」

「何言ってるんですか。王女としての勉強があるじゃないですか」

「え～、そんなの毎日やっていたら頭がパンクしちゃうよ。たまには息抜きが必要でしょ？ね、今日ぐらいいいでしょ？ローラ」

「いけません、姫様」

「ローラのケチ～」

「何度そう仰っても私の気は変わりませんよ。さ、着替えを出したのでこれをお着替え下さいね。着替えたら食堂にいらしてください。もうお食事は出来ていますから」

そう言ってローラは選んだ着替えをベッドの上に置いて部屋を出ていった。

ローラの選んだドレスに着替えるセフィリア。彼女は着替えながら今朝の夢をに出てきたウィルを思い出していた。

ウィリアム・ハーゲン。彼とは八年前に出会い、そしてその年に私の側から何も言わずに去っていった。

正確には私がこの国の反乱軍たちにさらわれて無事この国に戻ってきたときには彼は誰にも言わず、置手紙も無しに消えてしまった。

その八年前以降、彼の姿を見たものはいなかった。この私ですら見かけなかった。

一体彼は何処に行ってしまったのか。なんで黙って消えてしまったのか。あれ以来行方が分からなかった。

考え事をしながら純白のドレスに着替えたセフィリアは、自分の自室から出て行った。

オスティア隣国、グリア帝国。

オスティアと同盟を結んでいる大国である。

そのグリア帝国の軍がオスティアから何十キロも離れた平原にいくつものテントを張り、陣取っていた。

「本当によろしいのですか？」

あるテントの中でスキンヘッドの男が言う。

「ああ、そう上からはそう命令が下っている。オスティアに侵国しろ。とな」

対する白髪混じりの男はそう言った。

「しかし、ガネッド将軍、陛下がそのようなを申されるとは自分にはとても思えません」

「私もだ。あの温和な陛下に何が起きてしまったのかは私には分からん。だが、何にせよ、陛下の命令は絶対だ。しばらくしたらここを離れて移動をするぞ、オウカ」

「了解しました。ガネッド将軍！」

スキンヘッドの男、オウカはガネッドのテントから出て行った。

「……、一体この戦に何の意味があるのですか。陛下……」

一人になったテントの中で、ガネッドはそう呟いた。

オスティア城内。

オスティア城内の庭園を歩くセフィリア。

彼女は食事をとった後、少し時間があったのでこの庭園に来ていたのだった。毎日朝食を食べた後にここに行くことが彼女の日課だった。

色取り取りの花が咲きほこっているこの庭園はセフィリアにとって、幼い頃より遊んでいた思い出の場所だ。

彼女は歩く、色鮮やかな花々の中を。

だが、彼女は突然歩みを止めた。目前の木の根元に人がいたからだ。いつもの時間は誰もいないはずなのに。

セフィリアは不審に思い近づいてみる。そこには長い黒髪を結わえた一人の青年が座っていた。全身は黒い服装で目は閉じていて眠っているようだった。

その彼の体の傍らには、鞘、柄ともに真っ黒な刀があった。

（珍しい刀ね……。見たことが無い。）

以前に彼女はオスティアの兵士の武器を見たことがあったがこんなに真っ黒な刀は今までに見たことが無かった。

そして、セフィリアはその刀を掴もうとした時、

「それに触れないほうがいい」

声がした。眠っていたかと思われていた青年の声だった。

たまらず出した手を引っ込めるセフィリア。

「ご、ごめんなさい。つい珍しいものだったから」

「いくら珍しいと思っても、これは人殺しの武器だ。あんたがそう易々と持っていいものじゃない」

青年は立ち上がりながら言った。

たった姿はセフィリアより十？ほどの身長に差があった。

「あなた、オスティアの兵士なの……？」

（こんなところにいるんだ。間違いない。）

そう思っていたセフィリアだったが、見事にその考えは外れた。

「いや、違う」

「じゃあ、あなた何者なの……？」

一歩後ろに下がり彼女は言った。

「安心しろ。敵でもない」

そう言うと、刀を右手で拾い上げ歩き去ろうとした。

「待って！」

セフィリアは立ち去ろうとする青年に言う。

「せめて、名前だけは言いなさい」

「……クロイド」

振り向かずに答えた青年クロイドは去っていった。

（クロイド・・・、一体彼は何者なの・・・？）

セフィリアはただクロイドが去っていく姿を見ているだけだった。

その夜、セフィリアは自分の部屋にいた。

ベッドの上であぐらをかいていた。一国の王女がする姿ではなかった。

「一体あの男はなんだったの……。全く分からない」

自室で彼女は昼間に会った青年のことを考えていた。

長い黒髪、黒い刀。今の所、彼女が知っているのはそれぐらいだった。

（はぁ、てっきりあそこにいたのはウィルかと思っていたのに……）

あの庭園は昔、セフィリアとウィルが遊んだ思い出深い場所だった。

だから、彼女はすぐにウィルかと思ったのだった。いつか戻ってくる、そう信じていたからだ。

しかし、違った。人違いだった。

クロイド、それが今朝見かけた青年の名前だった。彼自身曰く、敵でもなければ味方でもないらしい。

「また、どこかで会うのかな……」

そう彼女は呟いた。

すると、突然ドアを叩く音が聞こえた。

彼女は慌ててベッドの上で姿勢をよくして座った。

「はい、どうぞ」

扉を開けそこに入ってきたのは一人のメイドがトレイを持って立っていた。

「失礼します。お茶のほうをお持ちいたしました」

「あれ？私頼んだっけ？」

「はい、さっき頼まれました」

（頼んだ覚えはないけど、まぁ、いっか）

「じゃあ、そこに置いといてくれる」

セフィリアは、テーブルの方を指差した。

「かしこまりました」

メイドはその指定されたテーブルにトレイごと置く。

「では、失礼します」

そう言うと、メイドはセフィリアの部屋から退室した。

するとすぐに、セフィリアはベッドから立ち上がりテーブルへと移動する。

そして、テーブルの上に置かれた紅茶の入ったカップを持ち上げ、ゆっくりと飲む。

しばらくして彼女は余程疲れていたのか、その場で倒れてるようにして眠っていった――。

「うまくいったか」

一人のメイドに対してそう問う男の声。

アスティア城の一室。さっきセフィリアの部屋に入っていったメイドの部屋だ。

「は、はい、、う、うまく姫様のもとに運び込みました。……こ、ここ、これで、、よ、よろしいのです、、よ、ね……？」

体中を震わせながら言う。姿の見えない男の声に向かって。

「そうか。なら安心しろ、お主はこれで自由の身だ」

「は、はい」

その声を最後に、男の声は聞こえなかった。物音一つもせずに。

メイドはそのままその場に座りこんだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい――」

泣きながら誰に対してかは分からないが、ずっとその誰かに向かってひたすら謝っていた……。

オスティア付近――。

「ガネッド将軍、準備が出来たようです！」

スキンヘッドの男、オウカがガネッドに向かって走ってきた。

「そうか……。引き続き、我らはここで待機だ」

「はっ！」

ガネッドはオスティアの遠い位置から、オスティア全体を眺めていた。

「……なぜこのような美しい国を我らが攻撃せねばならんのか」

独り言のように小さな声でガネッドは言った。

「――おやおや、その発言は裏切り行為ですかな、ガネッド将軍」

振り返る。そこには軽装で白髪の男が立っていた。

「コルテオ、か」

「なぜそのような嫌々な顔をするのですか？これは戦いですよ？戦争なんですよ？人をたくさん殺せるパーティなんですよ！！？」

笑いながら、コルテオは言った。

「むしろ私がそなたに問いたいものだな。罪のない者たちをこれから傷つけるというのに、なぜお主はそのように喜べる？」

「決まっているじゃないですか。こういうときだけ、人を殺せる唯一の時なんですよ。腹を切り噴出す血しぶき、それと同時に苦痛な表情を浮かべ死んでいく、これこそが私が美しいと思う瞬間であり、私の美学なんですよ。私にとって人を殺すのは、戦場の中で美しい本当の赤を見ることの出来る唯一の場所なんです。これが嬉しくなくてなんと思えるでしょうか！！」

まぁ、あなたには理解できないでしょうがね――と最後に付け足してガネッドに言うコルテオ。

「まぁ、それでもいいです。私さえよければなんでもいいんですから」

「……そなたにとっては残念なことだが、我々はただ殺戮(さつりく)をしにきたわけではない。この国を占拠すればいいだけの話だ。だから先に言っておくが、積極的に人を殺すな。向かってくるものだけ倒せばよい。……話は以上だ」

ガネッドは自分から話を打ち切るとまたオスティアのほうを眺めていた。

「――わかりました。では」

コルテオはそう言い、この場から去っていく。

（あまいですよガネッド将軍、あなたは何も分かってはいませんよ、戦争とはどんなものなのか、を。やられる前にやる。それがこの世の理で、この世界は弱肉強食なんですから……）

ニヤリと笑いながらその場から去っていくコルテオだった――。

第二章　戦場オスティア

オスティア城内。

暗闇の中、一人の男がいた。

「・・・そろそろか。雇い主殿をこれ以上待たせるわけにはいかんな」

男はどうやら天井裏にいるようだった。

他に誰もいないこの薄暗い中でじっと機会を窺っていたのだった。

「準備は完了。我が武器『爪刃（そうは）』の調子もよさそうだ」

男は自分の指の一本一本に装備されている刃を見ながら言う。

「――では、ひと暴れをするかな」

そう言って男は、音を立てずにいつの間にかその場から消えていた。

部屋の扉が開かれる。そこには、セフィリアが床に倒れていた。

ある人物の影がセフィリアに近付く。彼女はそれでも目が覚めない。
やがて人影はセフィリアの前に止まり、そして――

「国王陛下、大変です！この城内に侵入者が現れました！！」
一人の兵士が扉を勢い開け、アスティア国王のいる玉座の間に現れる。そこには国王の他に武装した二人の男がいた。
「何！？それはまことか！！？」
アスティア王の他にその場にいた一人の髪を後ろで整えた男が反応する。
「はい！敵は現在確認されているのは一名、只者ではない実力を持っています！」
兵士は慌てた様子で言う。
「陛下、ここは私にお任せを」

髪を後ろで整えた男はアスティア王に向かってそう言った。

「では、頼んだぞ。ゲハ」

「仰せのままに国王陛下」

そう言って玉座の間から去っていったゲハ。

「……奇妙ですね」

残っていたもう一人の男が呟く。

「どういうことだ。グレン」

国王はもう一人残っていた若い男に目をやる。

「陛下、これはおそらく陽動でしょう。」

「なぜ、そう思う？」

「――どう考えてみても、侵入者が一人でのこのこと、この王宮で暴れるはずがありません。相手の目的は分かりませんがきっとどこかに潜んでいるはずです。陛下、我らオスティア騎士団にご命令下さい」

「お主がそう思うのであれば、そうであろうな。よしでは行け」

「仰せのままに」

グレンもそういって玉座の間から出て行った。

オスティア北城門前――。

「……そろそろ時間だ。皆の者、攻撃開始だ！！」

オウカは兵士にそう伝え、正門に兵士と共に進攻を始めた。

同刻、オスティア南城門前――。

「では、そろそろ始めましょうかね。皆さん」

コルテオは後ろで控えていたグリアの兵士に言った。

「かしこまりました、コルテオ将軍。皆の者、攻撃開始だ！！」

兵士たちの叫びが地に響くかのようにここも進攻を始めた。

オスティア西城門前――。

「ガネッド将軍、伝令です！現在南門、北門、共に突破し、我が軍が進撃しております！」

「とうとう始まったか……」

苦痛な表情を浮かべ続けるガネッド。

「我々も進撃しましょう将軍！」

「我らも出撃すればこちらの被害も少なくなりましょうぞ！」

「陛下ご命令を」

「陛下！」

何人かの部下たちがガネッドにそう進言し続ける。

「……進撃だ。皆の者、出陣せよ！！！」

その言葉に呼応し、部下たちも自分兵士たちに向かって命令を出した。

「出陣だ！この門を突破せよ！！！」

こうして、怒濤（どとう）のような勢いでグリアの兵士たちはオスティアに向かって侵攻を始めた――。

オスティア城内――。

仮面で顔全体を隠している一人の男の辺りには何人ものオスティアの兵士が死んでいた。

「さて、もうそろそろ引き上げるか。雇い主殿も動き始めたようだ」

男の指に装備していた刃には血が付着しており、ポタポタと水滴がこぼれるかのように流れていた。

「――貴様が侵入者か」

背後から声がした。男は振り返る。

そこには髪を後ろで整えた男がいた。

「お主はオスティアの将軍、ゲハ殿か。聞いたことがあるな。この国で最も強い武人と言われているもの

か」

男は単調に言った。

「ほう、私のことをそう理解しているのなら話がはやい。今すぐ投降するべきだな。さもなくばこの剣で斬られたいか？」

そう言い、剣を鞘から抜いて構える。

「さぁ、どうするか。この神聖なるオスティアで命を奪うことはしたくはないんだが」

「……、契約には入ってはいないことだが、よかろう。お主は我が相手をしよう」

そう言って、仮面の男は『爪刃』をゲハに向ける。

「悪いが、我とてあまり時間がない。さっさと終わらせてもらおうか」

「ああ、そのとおりだ、な！！」

勢いよく仮面の男に突っ込む。

対する男はただ直立しているだけ、何の構えもしないで。

「ふ、死ぬ覚悟でも出来たのか！」

仮面の男に向かいながら、剣を自分の頭上まで振りかぶり、そして、

斬る――――はずだった。斬ったはずだった。しかし、どうしてだろうか。斬ったのは自分ではなく、斬ったのは、相手だった。

「な！！！！？？」

ゲハの肩からわき腹にかけて左右五本の腺で×印に斬られた傷跡から勢いよく血が飛び散る――。そして、そのまま倒れた。

「な、なぜだ……。貴様は何もしていないはず……」

弱々しい声で言うゲハ。

「そうか、お主にはそう見えたか。なら、この国の実力者とも言えど、実力が足りなかったか歳のせいか
のどちらかであろう。しかし、残念ではあったな。今し方に出会ったばかりの我に命を奪われるなんてな」

「く、、、そんなはずは、、、、」

仮面の男は倒れたゲハの目の前まで近づき言う。

「今死に行くお主だからこそ、良い情報をくれてやろう。先ほどからこの国は我が雇い主殿に攻められて
いるはずだ」

「！！！、なっ、それは、どういう、ことだ！」

「……悪いが我には時間がない、話は終わりだ。」

そう言って、仮面の男はゲハに向かって、トドメを刺した――。

「さて、本当に時間がない。ここにはあれがいる以上、さっさと退散せねばなるまい。」

そう言って、仮面の男は暗闇の中へ消えていった――。

オスティア城門前――。

「て、敵襲！敵襲です！！グレン将軍！！」

一人の兵士が、走って大声で言う。

「……やはりそうか。敵の数は」

「およそ八千ほどかと――」

「八千だと！！？――まずいな、敵はそんな数でこちらに攻めてきたのか。敵がどこの者か、分かるか？」

「そ、、それが。グリア帝国、です」

「なっ、グリアだと！！！？」

グレンは驚く。

（何故グリアがここに攻めてくるのか、同盟は破られてしまった・・・のか！！？）

「……いかがいたしましょう、グレン様。」

部下にそう問われ、我に返る。

「よし、――ではそなたは今から陛下と姫様に状況説明と避難の準備を任せる、迅速にな」

「はっ！」

兵士は城の中に入っていく。

「オスティアの騎士の諸君よ！これより我が軍は陛下と姫様の避難のための時間稼ぎ、及び住民の避難をする。皆、我に続け！！！」

こうして、オスティアの騎士団は城下町へと降りていった――。

城下町――。

「きゃあああああああああ」

一人の女性が斬られる。

「ああ、なんと言ういい声で叫んでくれるんだ！これだ、これこそがまさしく戦争というもの殺し殺されの戦慄の中、ここまで楽しいものはないですねえぇぇぇぇぇ！！」

叫ぶコルテオ、手には血で染まった剣が握られていた。

「コ、コルテオ様！ガネッド将軍からは住民は殺すなと命令が下っていたはず――」

言い切る前に、そのグリアの兵士の首は跳ねられていた。

「黙ってください。今私は最高に喜んでいるんですから人の楽しみの邪魔をしないでくれませんかね？」

その兵士の体は、血を勢いよく噴出しながら倒れた。

「ははは、なんという姿でしょう！私は自分の部下で美しい作品を作ってしまいました。しかし、なんという美しい姿でしょう！！」

笑いながら、それを見るコルテオ。周りの兵士たちの顔は青ざめて

いる。その様子に気付いてか、

「ん?、ああ気にしないで下さい。ただ私の邪魔をしなければこうはなりませんから。さぁ仕事をめいいっぱい楽しみましょうではありませんか!」

そう言って先へと進んでいくコルテオとその部隊。

しかし目の前に一人の青年の姿が映る。その青年はいつからいたのかはコルテオ達には分からなかった。

目の前の男は長い黒髪を後ろに束ねていて全身黒い服装、左の腰には柄と鞘、両方黒いものを挿していた。

その青年はその場にただ立っていた。

「ん?どうしましたか、腰でも抜かしましたか?目の前の光景に愕然とでもしましたか?」

そうコルテオは青年に対して言うが、反応は返ってこない。

「まぁいいでしょう。あなたもその身に体感すればいい話ですからね!!」

コルテオは二人の部下に指図し、青年に対して向かわせた。

ニヤニヤと笑い、見物するコルテオ。その様子をじっと見るグリアの兵士たち。そして向かってきているのに対して未だに逃げること

もしない青年。

兵士と青年の距離が近くなっていく――そして後数歩というところで青年は動いた。

左に挿していた刀の柄を右手で掴み、そして――

コルテオには何が起こったのか分からんなかった。近くにいた兵士ですら同様であろう。

ただ彼らの目には死んでいる二人の部下と、刀を片手に持っている青年の姿しか映っていなかった。

いつ抜刀したしたのかが全く分からなかった。

「き、貴様、一体何をしたのですか！」

コルテオは青年に向かって怒声を放つ。

「――貴様らに見えていなかったのなら、貴様らには一生分からないことだな」

そこで初めて口を開いた青年。

コルテオは青年の持つ刀をはっきりと見る。その刀は柄が黒いのはさっきから知ってはいたことだが、刃も黒かった。その刀は不気味だった。まるで人が持ってはいけない物の様に。

青年は、刀を抜刀したままでコルテオたちの目の前から突然、姿を消した――。

「なっ！！？」

グリアの兵士は辺りを見渡す。しかしどこにも姿が見当たらない。

「どこに消えたのです！探しなさい！」

コルテオの怒声が辺りに響く。もはや彼には楽しんでいる余裕がなかった。

すると突然、コルテオのずっと後ろのほうから人の叫び声が聞こえた。

コルテオは振り返る。しかし、振り返りきったところでどんどんと叫び声が重なっていく。

後ろでは次々とやられていくグリアの兵士たちの姿が映る。見えない何かによって斬られていく兵士たちの姿が。一人、また一人――。

何も出来ずにただ死んでいく兵士たち。

コルテオは理解した。あの青年はとんでもない者だったということを。

しかし、理解するのが遅かった。そうこうしているうちに次々と兵士は死んでいく。

「くっ、、何をやっているのですか！！はやく殺しなさい！！！！」

「し、しかし、姿が見えない以上、攻撃が出来ません」

「ええい！こうなったら私が相手をするまでです！！」

コルテオは剣を掴んだまま、見えない何かに向かって走る。

その間でも次々と叫び声をあげながら兵士は死んでいく。

一人の兵士が斬られた瞬間を見計らい、そして剣を縦に振った。

しかし、彼の剣からは手ごたえが全く伝わってこなかった。

辺りを見回す。時間がどれだけ経っても兵士はやられてはいない。

「――逃げられましたか」

厳しい表情で言うコルテオ。

「・・・・、あなた方は何をやっていたのですか？目の前で死んでいく仲間でも茫然として見ていたのですか

？何とも愚かなものですね、この部隊は！！」

味方の兵士に向かって罵声を放つ。

「いいでしょう…・・・。この国の者たちに死を与える前に先にあなた方に死を与えてあげましょう！！」

そう言ってコルテオは剣を構えだれかれ構わずに自分の兵士に斬っていく。

「コ、コルテオ様！落ち着いてください――」

「黙りなさい！この役立たず！！」

「コルテオ様お許しを――」

「コルテオ様――」

「コル――」

「コ――」

「黙れ、黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ、黙れえぇぇぇ！！！」

部下の言葉に耳を傾けずに一心不乱で剣を振るう。

「はーーっ、っはーーーっ、……何ということでしょうか。私というものがなんということでしょう。まさか罪もない私の部下を殺してしまうだなんて。ありえませんね……。とりあえず落ち着きましょうか――」

辺りを見回すと、辺り一面グリア兵の死体だらけだった。その場で生きているものはコルテオ、ただ一人だけだった――。

第三章　ガネッドの作戦

オスティア城下町――。

「皆さん！急いでこちらのほうまで移動して下さい！！」

グレンの声が辺りに響く。

住民たちは我先へと避難を始めていた。

「グレン将軍！！報告します。現在敵勢力がすぐそこまで来ています！」

一人の兵士がグレンに近寄り言う。

「分かった。お前は住民の避難を頼む。手の空いている者は私の後に続け！！」

グレンは馬に乗り、部下と共に敵の方へと向かっていった――。

オスティア中心部――。

「この愚か者が！！」

オウカの拳がコルテオの左頬にあたる。その衝撃に耐えられずにそのまま跳ばされ、倒れる。

コルテオは黒刀を持った青年にやられた後の経緯をガネッドらに知らされ、合流していた。

そして、コルテオと合流した瞬間にオウカは彼を殴った。

「――痛いですね、いきなり何をするんですか」

殴られた頬を擦りながらコルテオは言う。

「っ貴様、自分が何をしたのか分かっているのか！！」

「ええ、十分に理解はしています。私が部下を死なせてしまったことを、ね」

「ガネッド将軍から命令が出ていたはずだ！　関係のない住民、及び戦う意欲のない者の殺害を禁じられていたことを！！」

オウカはコルテオの胸倉（むなぐら）を掴み怒鳴る。

「それまでにしておけ。オウカ」

後ろでそのやりとりを黙ってみていたガネッドはオウカをなだめた。

オウカは舌打ちをしながらもガネッドの言うことに素直に従い離れる。

「なぜ、命令に背いたコルテオ」

ゆっくりと立ち上がりながらコルテオは言った。

「あまいんですよ、将軍は」

コルテオは語る、長々と。

「無抵抗な者は生かす？住民は生かす？この戦争に意味があるのか？――くだらない、実にくだらない。

戯言はやめてください。目の前の敵を生かすのですか？見逃すのですか？――有り得ませんね。そいつらはいつか力をつけ仲間を集め、我々に復讐を誓うでしょう、行うでしょう、必ず……。そんな危険な分子をわざわざ将軍は見逃せと？――ふっ、笑えない冗談はやめてください。寒気がします。この戦争に意味があるのか？……とてつもなく、くだらない。ええ、実にくだらないです。戦争に意味があるのか？ではあえて私から言わせてもらいましょう、『意味のある戦争とはあるのですか？』」

ガネッドはそう問われるが答えずに黙っている。

「……答えられないのですか。まぁ、思っていた通りですがね、将軍。あなたは私やオウカさんより実力は遥かに上なのは認めます。ええ、認めますが、あなたは心が弱すぎる。覚悟が無さ過ぎる。なぜいちいち人を殺すのにそんなに躊躇うのですか？あなたはグリアの将軍でしょう？そんなあなたがなぜ躊躇うのですか？――戦場ではどんな美しい理想を掲げても、どんなに綺麗な言葉を並べても、所詮戦争は人を殺すのが本分です。戦争に意味なんかありませんよ。――あなたはこの戦場で何を求めているんですか？理想ですか？平和ですか？実にくだらない、ええ全く、実にくだらないですよ。人を殺し殺され命を奪い奪われ体を斬り斬られ殴り殴られ人が泣き泣かれ叫び叫ばれ――ここはその数え切れない負の感情と行動しかないんです。あなたがどんな夢物語を見ているかは私には知りませんが――知りたくもありませんが、ここではそんなものは通用しませんよ」

長々と語るコルテオ、それに対してまず反応したのがオウカだった。

「コルテオ、貴様、将軍に向かってなんと無礼を！！」

オウカは近くにいた兵士が持っていた剣を奪い、コルテオの首の辺りで剣先を止める。

「――貴様は、私が直々にあの世へと送ってやろう！！」

そう言って、剣を振り上げる。

「やめんか！！！」

ガネッドが叫ぶ。

「――オウカ、剣を収めろ」

「なっ！し、しかし、この者今生かしておけばきっと後悔します！！」

「……今は同じ軍の仲間を殺すときではなかろう」

そう大人しい口調で、それでいて小さくはない声で言った。

「……くっそ！」

剣を鞘に収め、乱暴に部下に渡したオウカ。

「命拾いしたな……」

オウカは吐き捨てるかのように言った。

そう言われてもコルテオはその言葉には気にせずにガネッドに向かって言う。

「ガネッド将軍。あなたはなぜ戦うのですか？何のために戦うのですか？」

「……私は祖国グリアを、そこに住んでいる民を守るために戦っている。それだけだ」

「たとえ、あなたの嫌うこのような形でもですか？」
「……それが陛下が思うグリアにとって、民のためになるなら私は心を鬼にしよう」
ここで会話をひとまずは打ち切り、ガネッドは二人にこれからの作戦を話した――。

「――というわけだ。異議はあるか？」
ガネッドは二人に対してそう言った。
「……私は構いませんが」
オウカが先に口を開いた。

「ええ、いいですよ。でも、将軍。本当によろしいのですね？さっきまでの会話のつながりだと矛盾しているとは思いますが？」

続いてコルテオも口を開いた。

「構わん。たとえどのような形であろうとも、私の嫌うようなことであろうとも、これがお互いの被害を抑える最小限の方法だ」

ガネッドはコルテオに言った。

「――そうですか。分かりました。では、私は先へと向かわせてもらいます」

そう言ってコルテオは部下を引き連れてその場を離れた。

「……将軍、本当にこれでよいのですか？あいつ（コルテオ）にあのようなことを命令してしまえば、本当にそうします」

「……構わん。さっきも言ったとおり、たとえ私の嫌うような形でもこうする方がいいんだ」

オスティアにとってな、と後から付け足してガネッドは言った。

「ガネッド将軍！！オスティア兵がこちらに近づいてきました！！」
数人のグリア騎兵が勢いよくこちらに向かって言う。
「とうとうこのときがきてしまったか……。オウカ出撃準備を」
「はっ！！」
そう言って、ガネッドは馬に乗りグリア軍はオスティア兵に向かって進撃した――。

オスティア騎士団。

「グレン将軍、、敵が見えてきました！！」
先頭にいるオスティア兵がグレンに言う。
「よし、わかった。皆のもの準備はいいな！！」

オスティア騎士団全員、そのグレンの言葉に呼応した。

「では皆のもの我に続け！！！」

グレンは馬に乗り、自分の部下に向かって叫んび出陣をした。

こうして、オスティア軍とグリア軍の戦争は、始まった――。

第四章　オスティアの最期

「ぐあっ！！」

一人のグリアの兵士が倒れる。

オスティア騎士団、将軍グレンは先ほどより開戦されたオスティアとグリアの戦いで敵を斬っていた。

（なんという数だ……。やはり我が軍としてはつらいな）

グレンは辺りにいるグリア兵をだれかれ構わずに斬っていく。

何も考えず、何も思わずに一心不乱に斬っていく。

「くそっ！！やはり敵が多すぎる！！」

そう言いながらもまたグリアの兵士、一人を斬る。

オスティアの兵士はグリアの兵の数とほぼ同じほどだった。

数は互角。なんともいえない状況だとは思えた。がしかし――

「うおおおおおお！！！」

一人のグリアの者がとてつもない物を持っていた。

黒い鉄球に鎖で繋がれており、その鎖を掴んで鉄球をグルグルと周りにそれを回していた。

骨が粉砕する音。肉が潰れる音。そして、悲痛な悲鳴――。

男はスキンヘッドで常人より体がひときわ大きかった。

「なっ！？」

グレンは思わず声が出てしまう。

周りのオスティア兵が。味方が。部下が。死んでいく――！！

グレンはその男に、馬で向かって行く。

スキンヘッドの男の視界にグレンが映ると、

「ん、貴公はたしか、オスティアのグレン将軍とお見受けするが」

スキンヘッドの男はいったん鎖の動きを止め、グレンに問う。

「！！！、そなたはオウカ殿！」

グレンは男の姿を見て思わず叫ぶ。

「なぜ、あなたが、グリアが攻めてきたのですか」

グレンはずっと抱いていた疑問をオウカに問う。

「――私には、分からない。なぜこうなってしまったのか」

「どういう、ことですか？」

「我らの皇帝陛下は『オスティアに侵攻せよ』と言われただけだ」

目を閉じ、苦虫を噛み潰したような表情をしながら言う。

「なっ、、しかし……でも……」

グレンはどうやら混乱しているようだった。

「……すまぬ、グレン殿。これもグリアのため。理解は到底無理だと思われる。しかし、我らは
騎士。主のために戦うが本分。さぁ剣を構え、我を殺しにかかれよ。我も全力でお相手しよう」
そう言って、オウカは頭上で鉄球をゆっくりと回し始め、だんだんと回転の速さを高めていく。
「……私は、あなたを。グリアを。……怨みます。」
そう言ってグレンは馬から降り、剣を自分の顔の横で構える。
「さぁ。始めようか、グレン殿！！」
こうしてグリア、オスティア両軍の将軍の戦いが始まった――。

オスティア城内。

「陛下！お急ぎ下さい！！敵が近づいてきています！！！」
一人のオスティア兵はオスティア国王にそう言う。
「ああ、わかっておる。しかし、真なのか？あのグリアが攻めてきたのか……？」

オスティア国王は少し前に兵士に事の次第を言われて先ほどからこの城から逃亡をしようと敵のいない東門へと向かっていた。

「ところで、セフィリアは？」

「は、はい。別の班がお連れしています。ですから、陛下はご自分のことだけをお考え下さい」

「うむ。ならよい」

この時。兵士は嘘をついた。

彼がセフィリアの部屋に行ったときには、誰もいなかったのである。

しかし、国王がうろたえてしまわないようにとっさに嘘をついてしまったのである。

「民はどうなっている？」

「はい。現在他の兵が避難を行っています。多分、もう終えているかと」

これは本当のことだ。

「――おやおや。どこへ行こうとしてんですか？オスティア国王陛下」

いきなり背後から声が聞こえた。

国王たちが振り返るとそこには軽装で白髪の一人の男が立っていた。

片手には何かを持っていた。

「貴様、何者だ！！」

オスティアの一人の兵士が言う。

「私？　私のことですか？　私はグリア帝国将軍コルテオです。どうぞお見知りおきを。ああ――でも、関係ないことですね。だってあなたがたもこうなるんですから」

そう言ってコルテオは片手で持っていた何かをこちらに投げ出す。

「！！！」

一同はそれを見て驚く。それはオスティアの将軍、ゲハの首だった。

「おやおや。大丈夫ですか？顔が青くなっていますよ？でも安心してください。あなた方もすぐにこのようになりますから」

そう言ってコルテオは鞘から剣を抜く。

「――――っ、きぃさまあああああああああ！！！！」

オスティアの兵士達は剣を持ち、コルテオに向かう。

「――無駄なことです」

そう言って、一人目は腹を斬り、二人目は首を斬り、三人目は胸を斬り、四人目は腹を貫かれる。

向かっていったオスティア兵、四人が死んだ。

「さて、お次は？」

コルテオは無邪気に言った。

「――陛下。お先にお逃げ下さい。我らが少しでも時間を稼ぎます

から」
小声で一人の兵士がオスティア国王に言う。
「駄目だ。相手は私が狙いなのだろう。私がいこう」
そう言ってオスティア国王はコルテオに向かっていく。
「へ、陛下！何を！！」
兵士がそう叫ぶ。しかし、国王は振り返らない。
「ほう。投降されますか。正しい判断ですね」
コルテオは苦笑しながら言う。
「……私はどうなってもいい。だから民と兵士には傷付けないでほしい」
「ええ、いいでしょう。お約束しましょう。オスティア国王陛下。では、さようなら」
そう言ってコルテオは、オスティア国王の首を掴み腹部を勢いよく

剣で切り裂いた。

上半身と下半身が分かれる。血が辺り一面に飛び散る。床に。壁に。コルテオの顔に。服に。剣に。

「陛下あああああああああああああ！！！！」

オスティアの兵達は叫ぶ。もう動かない、もう喋らない、それに向かって。

「さて、私の仕事は終わりですね。ああ、あなた方は逃げるなり我がグリアの兵士になるなりどうぞ、ご勝手にしてください」

剣を鞘に収めながら言うコルテオ。

「貴様、許せん！！陛下の仇、今討たせてもらおうかあぁぁぁ！！！」

それぞれが鞘から剣を抜き、コルテオに一直線に向かう！

「やれやれ、愚かな者たちですね。私はあなたがたの陛下の約束を守るつもりでしたが――」

そう言って、また鞘から剣を抜き取り、一人、二人、三人、四人、五人――斬った。

「まったく。あなた方は酷い方々だ。私を嘘つき者にするなんて、でもまぁ、それも悪くはないですかねぇ」

ニヤリと笑うコルテオだった――。

オスティア中心部付近――。

剣と鎖の当たる音が辺りに響く――。

あれから何十分か経っていた。

オスティア騎士団をまとめている将軍グレンと、グリア帝国将軍オウカの戦いはどちらが優勢かなんて答えられなかった。

「さすが、グレン殿。その歳でそこまでとは凄い物ですな」

オウカは鎖を使って鉄球を自在に操りながら言う。

「――そんなことを言えるということは私を相手にするのは余裕ということですか？なめられたものです。」

「そうではない。ただ素直に驚いているだけだ」

「・・・私はあなたを、あなたという方を友と思っていました。同じ騎士として志が同じかと思っていました。だが、そんなことは無かったようですね」

そう言われたオウカは何ともいえない複雑な表情を見せる。

「くだらない話は終わりです。あなたは私が葬らせてもらいます！！」

そう言ってグレンはオウカに突っ込む。

それに対してオウカは鎖で鉄球をグレンの方に向かわせる。

グレンはそれを体を器用に、ぎりぎりのところで避けた。鉄球は固い地面に当たり、地面が砕ける――。

「くっ！」

鉄球を避けられたオウカは声を漏らす。

鉄球を避けたグレンはそのままオウカの元に進んでいく――。

「これで、終わりだ！！」

そう叫び、剣を地面に垂直で突っ込む――がしかし、オウカの体の寸前で彼の剣先は止まる。横から声がしたからだ。

「はいはい、そこやめてください。戦いは終わりましたよ」

声の主は手をパンパンっと叩きながら言った。

声のする方へ振り向いた。すると、グレンの顔がだんだんと青ざめていく。

そこにいたのはコルテオだったが、彼が驚いたのはコルテオではなく、彼が片手で持っていた物に衝撃を受けたのだった。

「ん？　ああ、これですか。よく見せましょうか。はい、どうぞ」

コルテオは乱暴にそれをグレンの方に投げた。それは何回転もしな

がらグレンのもとにいき、ゆっくりと地面の上を転がりながら、やがてそれはグレンの足元に止まった。

それは――その物は――オスティア国王の生首だった。

「う、嘘だ、へ、陛下が、我が国王陛下が死ぬはずが無い。このようなことになるはずがない……」

グレンは顔を横に振りながら言う。剣を持つ手は小刻みに震える。

「残念ですが、これが現実です。認めてください」

コルテオは冷たくグレンに言い放つ。

「き、きさぁまぁあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

グレンはオウカに向けていた剣をコルテオに向けて咆哮しながら向かう。がしかし彼の動きは止まる。

まわりにいたグリアの兵士の持つ剣によって、制された。

「く、くそぉぉ……」

そのまま地に体を落とすグレン。

彼は辺りを見回した。そこらに無事であろうオスティア兵の何人かが見えた。

しかし、それよりも多くの死体が視界に映る。腕が無い者、頭部が

無い者、足が無い者、体のあちこちが曲がっている者――数え切れないほどの両軍の死体が地面を埋めていた。

「オスティア騎士団、グレン将軍ですよね？　安心して下さい。東の門から避難しようとしていたオスティアの国民たちも大丈夫ですよ。我らグリア軍が捕獲し、捕虜となっていますから」

「……何を安心しろというのだ」

小声で言い返す。

「殺されるよりかはマシでしょう？」

不思議そうにコルテオは言った。

しかし、そんなコルテオの言葉はグレンの耳には届かなかった。

ただ、陛下が死んでしまったという衝撃的な事実にうろたえているばかりだった。

「オウカ将軍、この後彼らはどうするのですか？」

一人のグリア兵がオウカに近づきオウカに言う。

「……ひとまずは、グリアに連行することになるであろうな」

こうして、たった一夜でオスティアは滅んでしまった。

数々の痛みと悲しみ、ただそれら負の物を残していって――。

第五章　旅立ち

これは私の八年前の記憶――。

暗闇の中、私の体は両手両足を縄で縛られていた。口には布で喋られなくしている。

何人かの大人たちが私を囲むように立って見下ろしている。

大人たちは私を見ながらニヤニヤと笑いながらそれぞれが言う。

『この娘を使えば、オスティア王からたんまりと金がもらえる』

『いやいや、もっと搾り取れるかもしれんぞ』

『金？否、もっとよりよい財宝がもらえるのでは』

男達は私を前にしてそれぞれが思ったことをすぐに口に出していた。

誰か助けて！――そう思った。その考えに一人の男が気付いたのか。

『無駄だ。助けなんかきやしねぇよ』

ゲラゲラと笑いながら私のあごを上げさせられる。
その様子を見て、他の男達もつられて笑う。
――もう駄目かもしれない……。そう思っていたときだった。
『ぐあ！！』
男の悲鳴が外から聞こえた。
私を見下ろしていた男達はお互いの顔を見合わせる。
そして、一人の男が様子を見に行く。垂れ幕を上げて出て行こうとしたその刹那！
男は斬られた。真っ二つに。
『！！！』
男達は声が出ないほど、驚いた。
男を斬った人物の顔は暗闇の中でよく見えなかった。
ただ、右手に刀みたいなものを持っていたような気がした。
『だ、誰だ、貴様！！』
男の一人が言う。しかし、返事は返ってはこない。
『か、構うもんか、お前ら、やっちまうぞ！！』

男は次々に腰から、懐から、各々の武器を取り出す。
そして、入ってきた人物に向かっていく――がしかし。
男達は無残にも残酷にも刀を持つ人物によって斬られてゆく。

『あとは――貴様だけだな』
刀を持っている人物が言う。声からして男であるのは確かだろう。
しかし、当時の私はこの声は聞いたことがなかった。
無残に殺されていった仲間を見つめて、男は床に腰を抜かしていた。
『た、、助けて、、い、命、、、だけは、、頼む、、』
必死に命乞いをしていた。刀を持つ男に向かって。
しかし男は言った。
『――セフィリアをこんな目にあわせておいて、よくそんなことを言えるものだな』
そう言って、男は最後の一人を斬って殺した。

私は恐くなった。刀を持っている男が急に恐くなった。

な、なんで、私のことを知っているの！？　私をどうするつもりなの！！？

多分、体中が振るえていただろう。恐怖に怯えていた顔をしていただろう。

しかし、そんな私を気にしようとはせずに男は刀を持ちながら、ゆっくりと私に近づく。

や、やだ、、、こないで！！

そう思っていることしか出来なかった。体は動かせない。両手両足が縛られていたまんまだったからだ。

そして、男は私の前まで移動して立ち止まる。

そして、持っていた刀で私を斬った。

がしかし斬ったのは私じゃなくて、縛っていた縄だった。

混乱する私。その様子をみてか、男は言った。

『××××××××××××××××××××××。……××××××××××××××』

え、何？　なんて言ってるの。聞こえない……。

口をパクパクと動かしているだけで何を言っているのか全く分からない。

『じゃあな、セフィリア。もう忘れろよ。……ウィリアム・ハーゲンのことをな』

そう言って男はその場から立ち去ろうとして体を反転させて歩いていく。

待って！　一体どういうこと。なんであなたが、ウィルのことを知っているの！！？待ってよ――。

そこで私の記憶は途絶えた――。

「ん……」

目を開く。ぼんやりとだが、視界が見えてくる。視界には、青く広々とした空が見えた。

いつの間にか夜が明けていたようだった。

体を起こすセフィリア。

辺りを見回した。辺りは木々で囲まれていて、草が乱雑に生え渡っていた。

「――目が覚めたか」

突然、背後から男の声がした。

セフィリアは驚き、後ろを振り向く。そこには、全身黒い服装で長い黒髪をした青年が立っていた。

「あなたは確か……クロイド……？」

思い出しながら言う。

「ああ、そうだ。オスティア王女セフィリア姫」

クロイドはセフィリアの元へと歩きながら肯定した。

「――ここは、一体どこなの……？」

辺りを見回しながら言うセフィリア。

「ここは、オスティアからいくらか離れた森の中だ」

「……！！、なんで、あんたが私をこんなところに連れて出したの！？　どういうこと！？　説明しなさいよ！！」

どうやら、セフィリアは状況を読めていないようだった。

「まぁ、いったん落ち着け。手短に話させてもらう」

そう言ってクロイドは語る。

「まず残念なことを伝えなければなるまい……」

一拍置いて、言った。

「オスティアが滅亡した」

「……は？」

セフィリアは唖然とした。唐突にそんなことを言われれば冗談としか思えない。

「な、何言ってんの？　あなた冗談のセンス無さ過ぎよ。そんな有り得ない話を誰が信じろって――」

「……残念だが、本当のことだ。この顔が冗談をいうような顔に見えるのか？」

そう言ってクロイドはセフィリアに向かって顔を近づける。彼の顔は無表情で真剣な表情だった。

「で、でも、、私は、あそこにいたのよ。昨日の、夜に、ちゃんと、、自分の部屋に・・・」

そこでセフィリアは思い出す。

（あれ、私いつ眠ってしまったんだっけ？）

「どうやら、あんたは長く寝すぎていたようだな。……あんたはオスティア滅亡した日より、二日は経っている」

そう言いながらセフィリアより顔を離しながら言うクロイド。

「じゃ、じゃあ、オスティアの民は、皆は、お父様はどうなったの

！！？」

今にでも泣きそうな目でうったえるセフィリア。

「――俺にはどうなったかは分からないが、生きている確率は少ないだろうな……」

セフィリアから視線を逸らしながら言うクロイド。

「そ、そんな訳ないじゃない……。絶対に生きているわ。皆無事に過ごせている。問題ない。そうでしょう！！？」

「――だと、いいな」

今度は目を瞑りながらクロイドは言う。

「じゃ、じゃあ、……誰が、どこが、……オスティアに攻めて来た……、っていうの？」

「――グリア帝国だ」

「グ、グリア帝国！！！？　そ、そんな、ことが、あるはずがない。有り得ない。だって、オスティアとグリアは同盟を結んでいて、両国は特に目立った問題もなかったはず、一体どういうことよ！！」

「その理由ですら俺にも分からん。何故あそこまで平和な関係だった両国がこんなことになってしまったかなんてな」

「そ、そんな……グリアが……グリア帝国が……そんなわけない……」

その場に座ったままで、俯きながら否定を繰り返すセフィリア。しばらくして――

「……あなたが、やったんじゃないの？」

小声で言うセフィリア。その声は小さかったが十分にクロイドの耳に入っていた。

「あなた言ったわよね。私に。敵でもなければ味方でもないって。私をこんなところまで連れ出してきた理由は知らないけれど、私はあなたに騙されたりはしない。そうやって嘘の情報を言ってどうしたいのか知らないけれど、私はあんたなんかに騙されない！！」

クロイドに向かって、罵声を浴びせるセフィリア。

「……俺のことを信じられないのは分かるが、全部言ったことは真実だ。グリアはオスティアへと侵攻し、民を傷つけていた。」

「そんなに言うんだったら、どうしてあなたはオスティアを守ってくれなかったの！！　あなたが何もしなかったから私の国は、オスティアは滅んじゃったんでしょ！？　あなたが戦えば、悲しむ人が少なくできたんじゃないの！！？　あなたは目の前でただ人が死ぬのを見ていたって言うの！！？　何とか言いなさいよ！！！」

クロイドに大声で非難するセフィリア。

「……俺にだってやるべきことはやった。だが、優先順位があったから出来なかった。……それだけだ」

クロイドは俯きながら言う。

「優先順位って何よ。目の前に人が死んだり、苦しんだりしている中であんたは何をしようとしていたってわけ？　ああ、分かった。あんた、盗賊なんでしょ。民家から金を盗んで、人が死んでいるっていうのに金を盗んで自分だけはぬけぬけと戦場からぬけていったんでしょ？　そうなんでしょ！！」

「そんなことはない！！　俺にはどうしてもあんたを守らなければならなかった！！　たとえ近くで誰が死のうと、傷つこうと、苦しんだりしても！　あんただけは守らなければならなかった！！！」

クロイドは全力で、大声で、怒鳴るように否定した。

「ど、どういうことなの……？　そんなに私を守る理由があったっていうの？」

「――それは言えない。だが、いつか、きっと話せたら、時がきたら話そう。……大声を出してすまなかった。」

「そう……、分かった。私こそあなたのことを疑ったりしてごめんなさい」

互いに謝るセフィリアとクロイド。二人の周りに気まずい空気が流れる。

そんな中、クロイドは口を開く。

「――ただ、これだけは信じてほしい。俺はあの時、敵でも味方でもないと言ったが、俺はあんたの味方になった。あんたのためなら何だってする。そう、誓った」

「……分かった。そこまで言うならあなたのこと、信じます。オスティアの名に懸けて」

「有り難い。恩に着る」

そう言って、クロイドはセフィリアのほうに手を差し出した。

「では、行こうか姫」

それを聞いたセフィリアは不満な表情を浮かべて言う。

「姫とか。堅苦しくてやだ」

「では、なんと呼べばよい？」

「セフィリア、って呼びなさい。たった今から」

「それは無理なことだ。俺は下っ端の者だ。位が高いものにそんな馴れ馴れしく言えるものではない」

「いいじゃない。オスティアは滅んだってことは私はオスティア王女じゃないってことでしょ？　それにどこに行くかなって知らないけれど、身分は伏せたほうがいいんじゃないかしら？」

「……もっともなことを言ってくれるじゃないか……。いいだろう、ではいくぞ、セフィリア」

懐かしく、自分の名を言われたセフィリアは喜んで彼の手をとり立ち上がった。

「で、これからどこへ行こうっていうの？　クロイド」

森の中、クロイドの隣を歩きながら言うセフィリア。

「まだ、ここはオスティアの国土だ。まずはこの森を抜けてアラスク山を越える」

「アラスク山の向こうってたしか、聖国コーデリアがあるじゃない」

「ああ、そうだ。コーデリアに向かい助けを借りなければなるまい。……道程は厳しいと思うが、ちゃんと休憩は挟むつもりだ。だから安心しろ。セフィリア」

「分かった、クロイド」

そう言って、セフィリアは前を見つめて歩く。

こうして、彼らの長い旅が始まった――。

彼らの行く先に何があるのか、果たしてそれは希望か。または絶望か。

それは誰にも分からない……。

第六章　グリア帝国

グリア帝国。この国は穏健な思想を持つグリア帝王が王の国家である。そんな似たような思想を持つグリアとオスティアは数年前からオスティアと同盟を結んでいた。しかし、グリア帝王の抱いていた思想はいつの間にか逆に変わり、グリアは少しづつ、軍事国家になっていった――。

オスティアとグリアの戦争が終わり、その結果。グレン達とその配下の部下、それにオスティアの生き残りの国民達はグリアに送られた。

グリア帝国、グリア城、王座の間――。

何人かのグリア兵に押さえられながら、グレンは、グリア国王の前に跪かされていた。

グレンは、跪いた状態でグリア帝王を睨みつけていた。

「ほう、そなたがオスティアのグレン、か。よくもまぁ、無駄な足掻きをしおって……。そのせいで我がグリアの兵が減ってしまったではないか」

グリア帝王は言う。

「……なぜ、なぜだ！！！　なぜ、グリアはオスティアに侵攻した！！　同盟、同盟を結んでいたはずだ！！！」

グレンはずっと心の中で溜め込んでいたことを吐き出すように叫ぶ。

「同盟？　はて、……ああ、そんなもの、……あったな」

とぼけるように言うグリア帝王。

「しかし、だな。オスティア将軍グレン殿。この際理由なんてどうでもいいとは思わんかね？　過去の話にとらわれていては前には進めないぞ」

「ふ、ふざけるな！！！　貴様らグリアは卑怯だ！卑劣だ！鬼畜だ！　貴様らはなぜ、どうしてこんなむごいことを平気で出来る！オスティアが一体何をしたというのだ！！！」

「……オスティアは何もしてはいないな」

「だったら――」

「あの土地がずっと前から欲しかった」

「……　……　何だと……？」

「あの場所、オスティアは実に美しい場所だ。我にとって相応しい場所であろうな。同盟？　そんなものこちらに都合がよければなん

でもよかった。貴様らが油断していれば何でも良かった。――まさか貴様らがここまで思い通りに油断していたとは思わなかったぞ」

「き、っきぃさぁまぁあああああああああああああああ！！！！！！！」

グレンの怒鳴り声が辺りに響く――。

「うるさいな……。でも、まぁ貴様らオスティアだって悪いのではないのか？」

「何だと？」

「油断をしていたのだろう？　わざわざ、偽りの平和にただただ呆けていただけなのだろう？　ただ寝て食って遊んで、そんなことをただ繰り返し、まともな戦闘訓練をしていなかった貴様らが悪いのではないのではないのか？」

「……くっ、……」

「良いことを教えてやろう。オスティア将軍、グレン。この世は弱肉強食であり、弱い者に生きる場所なんかない。そして、こうも言っておこうか。どんなに実力が良い者でも、隙を見せた奴はすぐに死ぬ。――この世は『弱肉強食』と『油断大敵』だ。実力がよく、隙を見せない者が生き残れる……それがこの世の理だ、グレン将軍」

「……その実力も悪く、隙を見せた我らどうするつもりだ？　グリア帝王」

目は睨み付けたままで言うグレン。

「なに。私もそこまで他人に、敗者に厳しくは無い。――なぁ、グレン。そなた、このグリアで将軍として活躍しないか？」

苦笑しながら言うグリア帝王。

「ふざけるな。誰が祖国を亡ぼした憎きグリアの兵士として働くものか！」

「そうか……、それは非常に残念だな。そなたは随分と自己中心的な考え方をする若者だったのだな……。ああ、非常に残念だ。亡くなられたオスティア国王が見ていたらなんと思うかな……」

「戯言を。下らない事は言わずに、さっさと私を殺せば良いだろう！！」

「戯言……？　ああ、そうだな。そうかもしれんな。だが、どうであろうな。だがそなたは何も考えてはおらんんようだな」

「何をだ」

「例えば、そなたの部下どもはどうなる？　そなたが死んだらオスティアの民達も全員血祭りにあげさせてもらうが？　――それでもいいと言うのなら我は何とも思わんよ」

「……人質……か」

舌打ちをしながら答えるグレン。

「簡単なことだ、グレン。そなたが死ねば、オスティアの民達は死

ぬ。そなたが生きていれば、民の命だけは保障してやろうか」

「……貴様は卑怯だ……」

「何とでも言うが良い。我はどちらでも良いのだぞ、死のうが生きようがどうでも良い」

グリア帝王はゆっくりと、グレンの元へと近づき言う。

そして、ゆっくりとしゃがみグレンの顔の位置まで自分の顔を下げて言う。

「さぁ、どうする？オスティア将軍、グレン・ハーゲン」

グレンはグリア帝王の顔を睨み続けていた――

オスティア領、辺境の町　オストン――……から少し離れた一軒の木造で出来た廃屋。

オスティア滅亡から早五日――。

クロイドとセフィリアはアラスク山を登るための準備としてこの町の近くの廃屋で身を潜めていた。

「まず、その服をどうにかしようか」

セフィリアが身に着けている真っ白なドレスを見ながらクロイドは言った。

「……なんで？」

キョトンとした様子で答えるセフィリア。

その様子に溜め息をしたクロイド。

「……あのな、あんたは一応逃亡している身だ。そんな高価なドレスを着て街中を歩いていたら即グリアに連行される。だから、まずはそのドレスから別の物を着てもらう。いいな？」

そう言い理解を求めたクロイドだったが、彼女の答えは――

「やだ」

たった二文字だった。

「……お前、俺の言ったこと理解してないだろ。だから――」

「理解したけど、やだ」

「随分と反抗的だな、……お前」

「だって、これお気に入りなんだもん！　いいじゃない、服なんかどうだって。私はお気に入りがいいの！！」

そう言われたクロイドは頭を悩ませた結果、こう言った。

「――分かった、ああ、分かった。じゃあ、こうしよう。お前が気に入る物を選んできてやるからそこで待ってろ。」

「な、なんで、私が選んじゃ駄目なの！！？」

「……お前、本当にこういう時の理解が足りない奴だな……。いいか、店で選ぶ前にその今着ているそのドレスしかないんだろう。それで街中歩いていたら、すぐ捕まる。まずはお前のお気に入りとやらを買う前に俺が適当に選んできてやるから、そこで待ってろって言ってんだ」

呆れた様子でそう言ったクロイドはセフィリアを一人、この廃屋で待たせて、オストンへと向かっていった――。

かれこれ三十分後――。

クロイドは袋を片手で持って戻ってきた。

「買って来たぞ……って、お前な……」

クロイドは戻ってきたとき、セフィリアは寝ていた。

その様子を見て、クロイドは彼女の元にゆっくりと近づいて、セフィリアの寝顔を見る。

「……本当に、これが王女の寝顔なのか……まるで、どっかのおっさんみたいな寝顔じゃないか……」

よだれ垂らしているし……。

そう言って、クロイドは彼女の鼻を摘んだ。

すると、セフィリアの顔はだんだん赤くなっていき――

「何すんじゃあああああああ！！！」
クロイドの左頬に向かって、お目覚めそうそうの左フックを浴びせようとするが、彼はひらりとかわす。
「なんだ。セフィリアか。てっきり、どっかの昨晩酒を飲みすぎてしまい、自分の家にも帰られずにその辺で寝ている親父かと思ったんだが」
「的確に言っても駄目！！ていうかあんた、悪意１００％で行っていたでしょうが！！」
「まぁ、そんなことはどうでもよくて。買って来たぞ、ほれ」
そう言って彼女の元に軽く袋を投げるクロイド。
「ああ、そう言えば、そんなの頼んでいたわね。どれどれ……」
そう言いながら、彼女は袋を開け中の物を取り出す。
それは、フードのついた真っ白なローブだった。
セフィリアはそれを広げて、自分の体に合わせてみる。
「ふむ。サイズはぴったりみたいだったようだな」
そう眺めて言うクロイド。
「……なんか……可愛く…ない……」

いかにも嫌そうな顔をするセフィリア。

「……まぁ、気にするな。とりあえず、それに着替えておけ。……後で町で他の買えばいいだろう」

そうなだめるように言うクロイド。

「じゃあ、俺は外に出ているから着替えておけよ」

そう言って、扉を開け廃屋から出て行くクロイドだった。

第七章　夢の中

ここは真っ暗な場所で、俺とアイツしかいない場所だ。

『お主はどうして我を追うのだ……？』

そう問われた。俺は答える。

『決まってんだろ。俺はあんたに奪われたものを取り戻すためにあんたを追ってるんだよ。そのためにこうしてあんたを長い間ずっと探してきてんだろ』

それを聞いたアイツは笑いながら言う。

『奪う？お主の何を我が奪ったか？我はお主から何を奪ったというのだ？我は何も奪ってはいないぞ？』

『ふざけんな。あんたは俺のものをちゃんと今も持っているんだろ』

あいつはやっと気付いた。俺のものに。俺のものだったものに。

『……ああ、これのことか。でも、これはすでに我のもの。それにお主が望んで我に捧げたものであろう？』

『ああ、そうだな。けどな、俺は生憎欲深い人間なんでな。これも欲しい、あれも欲しい。そういう考え方をしてんだよ』

そう言うとまた笑うアイツ。

『欲深い……か。お主はあれから考え方がだいぶ変わった様だな。あの頃は自分の願いが叶えられれば何でも良かったのではないか？』

『ああ、そうだな。けどな、時が経つにつれて、人の考え方って変わるもんだろ？』

『ふ、お主は面白い考え方をするな。だが、この広い世界で我を見つけることが果たしてできるのか？そして、我からこれを奪い返してどうなるというのだ？お主は今持っているものを失うことになるぞ。それでもいいのか？』

『ああ、俺はそれを取り戻す。そして、たとえこれが無くなっても、俺自身でセフィリアを守ってみせるさ。だから待ってろよ。近いうちにあんたを見つけ出して、俺は取り返させてもらうぜ。俺のものをな』

そう言ってやるとアイツは、

『そうか、では楽しみに待っているぞ』

そう言って俺の前から姿を消した。

その後、誰かの声が聞こえた。

――ク、、、ド……。

――クロイド……。

――クロイド。

――クロイド！！

そこで彼は我に返った。

「あ、ああ、なんだ。どうした？」

クロイドは答えた。

「あんた、さっきから何ぼけーっとしてたの？ほら、スパゲッティ冷めちゃうでしょ？」

そう言ってセフィリアは彼の目の前にいつの間にか出されていた飯に目をやる。

「あ、ああ、そうだったな。すまない」

そう言って、フォークを手に取り目の前のスパゲッティを食べ始め

た。

「あなた、さっき何を考えていたの？」

「別に……。お前には関係のないことだ」

そう言って黙々と食べる。

その様子をみてセフィリアは言う。

「感じ悪すぎ……」

廃屋から出た二人はオストンの店で他の服を見ていたが、特にセフィリアが気に入るようなものは無く子供のように駄々をこねていた。その後、それほど悪くは無い質素なベージュ色のドレスを見つけそれを購入し店から出た。その後、二人は近くの店で食事をしていた。

「で、他に行く所はあるの？」

「そうだな……。とりあえず後は食料調達ぐらいだろうな」

「……そういえばさ、クロイドって防具を身につけたりはしないの？」

「いきなりなんだ？」

「だって普通さぁ、兵士って武器の他に防具を身につけたりするじゃない？あなたはそういうの身につけないの？」

「……防具は邪魔なだけだ。動きが遅くなるし重いし面倒だ。あんなもん何の役にもたたん。それにそんなもの無くても十分あんたを守れる自信がある」

「さようですか……」

あまりにも強気な発言だったため、ついクロイドに対して敬語を使ってしまったセフィリア。

このような二人の会話だと主従関係はもはや皆無に等しかった。

「――さて、じゃあ食ったことだし、さっさと食料調達でも行くぞ」

そうして、店から出る二人だった。

グリア城の一室――。

「陛下はなぜこのような心変わりをしてしまったんでしょうか。ガネッド将軍」

椅子に座りオウカとガネッドは向かい合ったままでガネッドにそう問うオウカ。

「……分からないな。あのお方は戦争を、戦いを嫌うおかただった。なのになぜであろうな……」

腕組みをしながら考え込むガネッド。

「兵士たちの間ではいろいろなうわさが流れています。『陛下はご乱心された』とか『あの陛下は偽者だ』とか、部下の間ではそのうわさで持切りです」

「ばかな……。陛下が偽者なわけあるまい……。いや、待てよ――」

そう言ってまた考え込むガネッド。

「?、一体どうかなされましたか、ガネッド将軍」

「いや、昔のことだがこのようなことを聞いたことがあるのだ」

「どのようなことでしょうか……？」

「この世界のどこかに人に幻を魅せることを生業とする者達がいる、と。どこかでそんな情報を聞いたのか見たのかは覚えてはいないのだが、存在するらしい。彼らは『幻術士』と呼ばれ、魔術にも似たそれは人の心を動かし幻をみせる。というのをどこかで聞いたことがある。――だが、これは真実なのか、偽りなのか、実際のところ、私には分からんよ」

「幻術士、ですか……」

「まぁ、そんなものは存在してはいないと私は思うぞ」

そう言って、ガネッドは椅子から立ち上がり、腕を真上に伸ばして言う。

「さて、話はここまでだ。ん、そろそろ訓練の時間であろうな。さ、行くぞオウカ」

「分かりました。ガネッド将軍」

そう言ってオウカも立ち上がる。この時オウカは考えていた。

（『幻術士』、か。本当にそんなものがいて、陛下の幻をみせているのであるならば、陛下はとっくに亡くなっていることになるので

は……いや、そんなこと有り得ないな。ばかばかしい。こんなこと
すぐに忘れるか）

そう思いながら、ガネッドに続いてこの部屋から出るオウカだった。

第八章　アラスク山（前書き）

第八章　アラスク山

グリア城内――。

「よくぞ決心してくれたな、グレン」

グリア帝王はグレンと向かい合いながら言った。

「……本当に、私が貴様らの元で働けば、我が民は無事なのだろうな」

グリアの鎧を身につけているグレンはそう言う。

「ああ、勿論だとも。私はそなたの言う通り卑怯卑劣だが、約束事ぐらいは守ってやるさ」

苦笑しながらいうグリア帝王。

「……その言葉、私の頭の隅にでも入れておこうか」

睨みながら言うグレン。

「――まぁ、これでその話は終わりにしておこうではないか、グレン将軍。さて、早速だが仕事の話だ。そなたには、ある場所に行ってもらおうか。」

「ある場所？いったいどこに行けというのだ？」

「アラスク山、という場所をご存じかね？」

「知っている」

「そこで、私にとっての邪魔者がいるらしい。今すぐにそこに向かってもらおうか、グレン将軍」

「その者の特徴は？」

「長く黒い髪をした男、ちょうどそなたと同じ年頃のものだ。我がグリア兵をたった一人で何十人も斬って殺した者だ。そいつを殺してきてほしいのだよ……」

「……いいだろう。行ってきてやる」

そう言ってグレンは背を向け玉座から離れようとしたときに、

「ああ、言い忘れていたことがある。そなたに一人味方をつけよう――」

そう言ってどこからとも無く一人の男が現れた。

その男は顔に仮面をつけていて素顔が全く分からなかった。

「この男は我がグリアが雇っている暗殺者だ。えっと、確か名前は――」

「不要。我に名などない。好きなように呼ぶがいい」

グリア帝王の言葉を遮るって発言した仮面の男。

「……まぁいい。とにかく、この者と行ってきてくれ。先にグリアの兵隊を向かわせたが……意味は無いだろうな」

それを聞いたのか聞かなかったのか分からないが、グレンはその場から背を向け去る。その後ろを仮面の男がついていく。

そして、玉座の間から出て行った二人――。

（――おもしろいことになりそうだ……。さぁ黒刀使い。どのように王女を守るのか、十分に楽しませてもらうぞ……くくくくく）

オストンで十分に買い込んだセフィリアとクロイドは聖国コーデリアへと向かうためにオストンから離れ、アラスク山の山中にいた。

「で、この山の中どれぐらい歩けばいいの？」

セフィリアは言った。彼女の隣には地図を見ながら歩く青年がいた。

「そうだな……、あと……、ふむ。……まぁ頑張れ」

彼は曖昧に答えた。

「いや、答えになっていないと思うんだけど……」

オストンから離れ、かれこれ一時間ほど。彼らはやっとアラスク山の山中に入った。

周りは木々で囲まれてはいるが、ちゃんと道は整備されており人が通れるようにはなっている。がしかし山なので、勿論――

「ねぇ、思ったんだけどさぁ、ここって狼や熊とか出ては……来ないよね……？」

問題はそれだった。山ということは自然の中。そして自然ということは人間ではなく動植物たちの世界。そして、そんな世界ということは――

「ああ、そうだな。ちゃんと出てくるぞ。」

毅然（きぜん）たる態度をとるクロイド。

「な、なんでそれを知っていてこんなところからコーデリアから向かおうとするの！？危険でしょ！！」

「危険？何でだ。俺がいれば何とも無いだろ。それに来たらきたで食料になってくれるから助かる」

「あなたのその自信はどこから湧いて出てくるのよ……って、食べるの！？」

「当たり前だ。――なぁ、セフィリア。お前『いただきます』の意味知っているか？」

突然そんな質問をされたセフィリア。

「いきなり何？『いただきます』の意味って何のこと？」

「つまりだな。何に向かって『いただきます』と言っているのか分かるかと聞いているんだ」

「そんなこと聞かれてもいきなりだからなぁ……んー、分かんない。答えは？」

「答えは簡単だ。命を『いただきます』ということだ。自分が普段食べてきているものには元々、生きていたものたちだ。そのものたちの感謝の気持ちを込めて『いただく』を『いただきます』と丁寧な言葉でいっている」

「へぇ～。それは知らなかった」

関心するセフィリア。

「……意外だなぁ」

「？、何がだ」

「クロイドってそんなこと知っていたんだ。見掛けによらずそんな

こと知っていたなんて意外だね」

「……お前の目からは俺がどんな風に映っているのか、知りたいところだな……」

そして、しばらく歩いていた二人は川の流れる場所に辿り着いた。

「――さて、そろそろ疲れただろう。少し休むか」

「ほ、本当！？　やったあ！！」

それを聞いたセフィリアは子供のように川ではしゃぎ出した。

「――さて、今は大体この辺りだから――……」

そう言いながら地図を確認する――が何かに気付いた。

「セフィリア。ちょっと来てくれ……」

「どうしたのー？」

クロイドの元に向かうセフィリア。

クロイドは自分の左腕を近付いて来たセフィリアに向かって肩にまわし抱くようにした。

「ちょ、ちょっと！いきなり何すん――「囲まれている」

「！！！、ど、どういうこと？」

「敵は、十――いや、二十――いやもっとか」

辺りを見回しながらクロイドは言う。

「どこにも、人影は見当たらないみたいだけど……」

その状態のまま首だけを動かし辺りをみるが人影は見当たらない。と思っていた瞬間だった。森の中から鎧を装備しすでに剣を持っている兵士達が何人も現れた。

「――グリア軍か」

クロイドはそう言うと何人、何十名かの一人が答える。

「いかにも我らはグリア軍だ。そこにいるオスティア王女を黙って引き渡してもらおうか」

「職務に忠実なことは褒めてやるが、断らせてもらおう」

「――では、貴様を殺してから黙って奪わせてもらおうか！！」

そう言い一人、二人、三人のグリア兵が、クロイドたちに剣を持ち向かってきた。

クロイドは空いている右手で左側の腰に帯刀してあった「黒刀」を抜刀する。その勢いを利用、一人目のグリア兵の腹部を斬る。次に

向かってきた相手には「黒刀」を振り上げ、そのまま勢いよく振り下ろし、三人目には振り下ろした「黒刀」を相手の右わき腹に向かって貫く――！

「ひ、ひるまな！！続け、続くんだ！！」

どうやら、さっき代表して喋った男がリーダーのようだった。その男に言われるがまま次々にグリア兵はクロイドたちの元へと向かってくる――。

その様子をしかと見ていたクロイドは、セフィリアだけに聞こえるように言った。

「しっかり、掴まっとけよ」「え――」

セフィリアが反応し終わる前に彼は「黒刀」を持った右手で彼女の両膝の部分にまわし、自分の胸の辺りで抱えグリア兵がいるほうの反対のほうへと走った。

「逃がすな！追え！！」

「ちょ、ちょっと！いきなり何すんのよ！！」

抱えられたまま暴れるセフィリア。

「暴れるな、落とすぞ」

そう言いながらも彼は森の中を走る――。

後ろにはグリア兵が後からついてくる。

「しつこい奴らだな」

「……」

必死に走り逃げているクロイドの顔を黙って見ているセフィリア。……まぁこの状態なら何もできないが……。彼女はこの状況で何かを思い出しそうだった。

（この顔、クロイドの顔……、どこかで見たことがある、…気がする……）

そう思いながらセフィリアはクロイドの顔を見る。

その視線に気付くことなく彼は無我夢中で走る。

「ねぇ」

「――なんだ？」

「なんで逃げているの？　さっき見たあなたの実力なら全員倒せるでしょ」

「…俺一人なら簡単にできる。だがな、お前、セフィリアがいるな

ら話は別だ。お前を傷付けるわけにはいかないからな……」

そう言いながらも彼は足を止めない。

「――つまり、私は『お荷物』ってことだよね？」

「ん？なんだ。お前にしては随分察しがいいな。自覚していたのか？それは今後大いに助かることだ」

「肯定しないで否定をしなさいよ！！人の心をよく想ってからものを言いなさいよ！！言われてみると結構傷つくのよ！！」

「だから、暴れるな。本当に落とすぞ」

クロイドの目はマジだった。

「いやぁあああ！分かったからやめて！！」

そんな会話をセフィリアとしながらでも、彼は目の前から現れる木の枝を避けている。

後ろには未だにグリア兵が追ってきている。

「……本当にしつこい奴らだな。仕方が無い、セフィリア、もっと強くしがみついてろよ」

「へっ？――何す」

またもやセフィリアが反応し終わる前に彼は行動を先に起こした。

今度は高く跳び、木の枝に足をつける。

そのまま、次々と他の木の枝に跳び移りながら進んでいく――。

「ちょ、ちょっとおお！！高い、高すぎるってえええええぇぇぇぇ！！」

「……うるさいから落と――「本当にごめんって！やめてください！！」

クロイドはまたもやセフィリアを落とそうとしたが、寸前のところでセフィリアが謝って事無きを得た。

「で、ここは大丈夫、……なのよね……」

セフィリアは途切れ途切れに言う。

「ああ、大丈夫だ。ここはあのグリア兵には見つからん。絶対にな」

対するクロイドは自信満々で言う。

「確かにそうだと思うけどさ、ここ、ぜぇぇぇぇぇったいに危ないって！！」

そう彼女は心のそこから心配に言う。

彼らの目の前に洞穴があった。岩盤を刳り貫いた洞窟は確かに安全そうなのだが……。

「熊とか熊とか熊とか絶対、熊とかいるって！！」

まさに熊がいそうな雰囲気をこの洞穴は出していた。

「安心しろ、絶対何もいない。俺は少しの間、奴らと遊んでくるからここで待っていろ」

「あんたの何を信じればいいのよ！！――って待ってぇ！行かないで！！」

そういう頃にはクロイドはすでに彼女の視界からは消えていた。

「……本当に何もいない……よね？」

目の前の洞穴を見ながら言うセフィリア。

彼女は怯えながらも洞穴に入っていった――。

回想　～十二年前、二人が兄弟になった日～

「父上、なんなんです？そいつは」

当時の俺は父上の後ろに隠れている男の子に指を差して言った。

「そいつとはないだろう。この子は今日から私の息子になり、そして今日からお前の弟になるんだからなぁ」

父上はそう言うとその男の子を俺の前まで引っ張りだした。その男の子の顔は赤くなっていて、照れているようだった。……いや、そんなことはどうでもいい。

「いやです」

きっぱりと断った。

「なんでだ？家族が増えることはいいことだろう？」

「弟がいるということは私にそいつのめんどうをみてろ。ということですよね？……俺はそんな面倒なことはいやです。俺は自分自身のことで精一杯です。第一そいつはどうしたんですか？」

「ああ、この子はな、道端で座り込んでいたんだ。話を聞いてみるとこの子には父親と母親が盗賊によって殺されてしまったらしく、今は一人ぼっちだったんだ。それで――」

「つまり、可哀相に思いうちの子にしようと。……たしかに同情を

しますが、俺は反対です」

「なぜそんなに頑なに反対する」

そんなの決まっていた。自分がよく分かっていたことだった。

「俺には力がありません。守りたい人を守りきれる力が自分にはないと思うんです。俺はまだこんなに若い。未熟です。ついこないだ、初めて剣を持ちました。あんなに重い物を持ったのは生まれて初めてでした。今でもちゃんと持ち上げることができません。……そんな俺がこの子を守れるはずがありません」

そうだ。俺には力がない。誰かを守れる事なんてできやしない。だから――

「そんなことはないさ」

父上はそう言った。

「たしかにお前は今はまだ未熟だが、そんなこと当たり前だ。俺だってそうだった――けどな、お前は俺が小さい頃とは違うものを持っている。なんだか分かるか？」

分からない。

「それはな、「思い」だ」

「思い？」

「ああ、そうだ。俺はただがむしゃらに強くなりたいって思ってい

た。何かを守ろうとは思わずに一心不乱にただ剣を振っていた。ただ強さを求めていたんだ。……けどな、お前は違う。お前は何かを守ろうとするために強くなりたい、そう思っている。今は力がないのは当たり前だ、まだ稽古を始めたばかりだしな。だが今のお前はちゃんとした理由がある。その思いをこの子のために向けてくれないか？」

俺はその父上の言葉を聞いて、そのすぐあとに目の前の男の子を見る。男の子は恥ずかしいのか下を向きながら俯いていた。

俺はその子の肩を叩いて聞いた。

「――お前、名前は？」

男の子は恥ずかしそうに答えた。

「…ウ、ウィリアム……シンヘルツ……です…」

「そうか、ウィリアムって言うのか。俺はグレン・ハーゲン。よろしくな」

そう言って俺はウィリアムに向かって手を差し出した。

ウィリアムは顔を上げて俺の顔をまじまじと見た。顔はまだ赤い。
ウィリアムは俺が差し出した手に視線を送らずにこう言った。

「あ、あの、ぼ、…僕が、この家の者になっても……いいんですか？」

途切れ途切れに言った。

「ああ、大丈夫だ。というか俺にそんなことを決める資格はないし、父上が決めたことなら俺は賛成だ。俺が反対してもいい理由なんてもうとっくにないから大丈夫だ。安心しろ」

「で、では、、……さん、って呼んでもいいですか？」

小さい声で言ったためなんて言ったのか全く聞き取れなかった。

「ん、なんて？」

「あ、い、いえ、なんでもありません。お気になさらずに……」

そう言うとウィリアムはまた俯く。

さん？……ああ、そういうことか……。

「俺のことは好きなように呼んでもいい、安心しろ」
その言葉を聞いてウィリアムは顔を上げる。
「ほ、本当ですか！？で、では、に、兄さん、と呼んでもいいんですか！？」
それだけのことでテンションが上がるものなのか……？
「あ、ああ、いいぞ。――そのかわりと言ってはなんだが一つ条件がある」
「？」
「俺がお前を呼ぶときには「ウィル」でいいよな？」
「……」
「ん？なんか駄目な理由でもあった……のか？」

目を閉じて体をわなわなと奮わせるウィリアム。

……なんか迂闊なことでも言ってしまった……のか？

「さいっこうにいいです！！その名、気に入りました！！是非それで、ウィルと呼んでください！兄さん！！」

目を輝かせながら言うウィル。

すげーテンションだな……。ついさっきまで俯いていた姿はどこにいったんだ？

「あ、……ああ、分かった。そう呼ばせてもらうよ。じゃあ、今日からよろしくな！ウィル」

「はい！兄さん！！」

――これがウィルとの初めての出会いの日であり、兄になった日でもあった。

今から十二年も前のことなのにここまではっきりと覚えているのが不思議だった。でもここまではっきりと覚えていることに俺は素直に嬉しいって思える。

けどこの四年後、ウィルは居なくなってしまった。何にも告げずに。

俺は生まれて初めて守りたかったものを守れなかったことがものすごく悔しくかった。この後、俺は必死に剣の修行に打ち込んだ。もう守りたいものを守れないなんていやだったから。

気がついたら将軍にまでのぼりつめちまったけど、そんなこと対して興味はなかった。ただ強くなりたかっただけだったけど、結局はまた守れなかった。自分が未熟なせいで、たくさんの部下とたくさんの国民、それに陛下を――死なせてしまった……。

だから、だからこそ、俺は今度こそ守る、守ってみせる。たとえ敵

の軍服を着ても、これ以上の屈辱でも、俺は耐えてみせる。守りたいものを今度こそ守るために。

ウィル……。お前はきっと今どこかにいるんだよな。どこかで生きているんだよな。俺は信じている。お前がどこかで生きているって、今もそう信じている。

俺はまだ死ねない。ウィルに再会するまで死ねない。グリアに復讐するまで死ねない。生きれるなら、何でもしてやる。罪のない人を殺しても、この二つのために死ぬわけにはいかない。

長く黒い髪をした男……か。こいつはオスティアにとっての強い味方なはずだ……けど俺はその男を殺さなくてはいけない。たとえオスティアの強い味方になろうとも俺は絶対に殺す……その男を。

第九章　出会ってしまった二人

アラスク山の森の中、グリア兵たちはクロイドたちを血眼（ちまなこ）になって探していた。

「まだ見つからないのか！！」

リーダー格の男が兵士達に向かって言った。

「は、はい、どこを見回っても見つかりません」

兵士の一人が言う。

「ええい！！こうなったらこの森を燃やせ！山火事を起こしてこの山もろとも消し炭にしてやる！！」

「――それはまずいだろ」

ふと、そのような言葉が聞こえた。辺りを見回す。

「どこ――「ここだ」

そう言って、一人の男が上から降って来た。……どうやら男は木の上にいたらしい。

「貴様、さっきオスティア王女といた奴だな」

「ご名答」

男、クロイドはそう言った。

「王女はどこだ！？」

「さぁな、今頃熊にでも食われてんじゃねーの？」

「……お前何言ってんだ？ふざけるな！さっさと居場所を教えろ、さもなくば貴様死ぬぞ？」

「じゃあ、俺からも言わせてもらおう。今すぐにこの山から降りな。そしたら、あんたらの命は助けてやるよ」

「ふざけるな！！」

そう言うと次々に剣を鞘から抜き、クロイドの元へと向かうグリア兵達。

「……やれやれ、聞く耳持たずってか」

そう言うと彼もまた黒刀の柄を握りしめて、向かっていった――。

「ここって本当に大丈夫なんだよね……」

一人ぶつぶつと言いながら奥へと進んでいくセフィリア。

洞窟の中は松明が一定の間隔にあって明るい。道は一本道で、分かれ道などなかった。心配していた熊は未だ現れず、むしろ現れない

ことが恐いとセフィリアは思っていた。

しばらく進んでいると、広い空間に辿り着いた。

「な……なによ……ここ……」

思わず声が出てしまった。

そこに心配していた熊、及び猛獣などの危険な動物の姿は一切無く、ただその代わりに、幾つもの剣が所狭しと地に——壁に——突き刺さっていた。

ある物は錆びて朽ち果てていて、またある物は新品同様、美しい白銀の刃をみせている。

セフィリアはゆっくりと奥へと進んでいく。

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、剣、

剣――……

前後上下左右、３６０度どこを向いてもそこにあるのは剣のみ。剣の墓場のような、なんともいえない不気味さ、恐怖がこの場に……あった。

セフィリアは辺りを見ながら進んでいくうちにあるものに気がついた。

「ん、なにこれ？」

それは小さな穴。地面に小さな裂け目がそこにあった。

これを見て、彼女は思った。ここには何かが刺さっていたんだと――。

「懐かしいな、ここに戻るのは何年ぶりかな」

突然、そのような声が聞こえた。振り返るとそこにいたのは顔全体を仮面で隠している――そんな男がそこにいた。

「誰……？」

セフィリアは男に向かってそう問うが男はその問いに答えずに言った。

「オスティア王女セフィリア姫。すまないが、そなたを利用させてもらおう」

「ぐあああああああ！！！」

地面に一人の男が倒れる。

「――これで、終わったな」

そう言うと彼は黒刀を勢いよく地面に向かって振り、刃に付いた血を落とす。

クロイドの辺りにはいくつものグリア兵の死体があった。生きて立っている者はクロイド以外誰もいなかった。

「さて、そろそろ迎えに行かないとな。お姫様が心配してるかもしれないしな……」

そう言うと彼は歩くが、何歩か歩いて何かに気付く。

「……覗き見とは良い趣味とはいえないな。出て来い」

そう言われた人物はクロイドの背後の木々からゆっくりとその姿を現す。その人物は鎧を身につけ腰には剣を差していた。

「随分と人の気配が分かるんだな。いつから気付いていた？」

男に声だった。クロイドはその男を見ずに言う。

「ついさっきだ。随分と大きな殺気を感じてな。お前、俺と戦いたい――いや、殺したいみたいだな……」

「その通り、悪いが俺にはやるべきことがあるからお前には生け贄になってもらうぞ」

「そうか……じゃあ」

ゆっくりと振り返りながら言うクロイド。

「あんたが死んでも文句は言えないよな？」

言い終えた後、彼は少し驚いた表情をしたがすぐに無表情に戻す。

クロイドの目の前にいるのはグリアの鎧を身につけた元オスティア将軍、グレン・ハーゲンがそこにいた。

「当然だ、その覚悟で騎士をやっているからな」

そう言うとグレンは鞘から剣を抜く。

「さぁ、そなたも構えろ」

「――　　んだよ……」

クロイドは何か言ったようだったがグレンには聞こえなかったようだった。

「何か、言ったか？」

「何でも……ない」

そう言い、彼も右手で黒刀の柄を握る。

「そうか。そなたはオスティアにとって英雄のような存在なのだろう。私の立場がこのようなものでなければ戦いたくはない。むしろ手助けをしているだろう。……だが、俺にそんなことはできない。そなたを殺すだけでたくさんの命が救えるなら、俺は……そうする」

剣を体の横に構えて、言うグレン。

「……そうか。悪いが、俺もそう易々と殺されるつもりはない。俺にだってやるべきことはあるからな」

そう言ってクロイドは腰を落として戦闘体勢にはいる。

ゆっくりと二人のいるアラスク山の森の中で風が吹く。散っていた落ち葉が舞う。地面には幾つもの死体。

望まぬ戦いが、始まる――。

第十章　互いの意志（前書き）

前回は約束を守れず、すみませんでしたm（__）m　今回は戦いがメインです。如何せん初めてなものでどうなのかは分かりませんが、これでもがんばった方なんで読んで下さい、お願いします><

第十章　互いの意志

「さぁ……来い」

なんで……。

「どうした？」

どうして……。

「早く来い。さもなくば……死ぬぞ」

どうして、こんなことになってしまったんだ。

どこで間違った。

いつ、どこで間違ってしまった。

あの時……からなのだろう……。

全てが狂ってしまったのは――

グリア帝国、グリア城内――。

「違う、これでもない」

ガネッドの話からでた『幻術士』という言葉に違和感を感じていたオウカは訓練の終了後、一人資料室で古い文献を読んでいた。

『幻術士』

人の心を惑わし、相手に幻を見せる者。

人の心に漬け込むもの。

存在自体、幻とされている者。

何百年も前に滅んだ一族――

「違う、こういったものじゃない。……きっと何かあるはずだ。この違和感、とてつもなく嫌なものだ……」

そう言いながらも、一冊一冊、乱雑に手に取り読んでいく。

（幻術士……そんな者が仮にいたとしたら、陛下は、陛下は……いや、そんなはずはない。決してありえない。もし、仮にそうであったとしても多人数同時に幻を魅せられるのか？　幻術士とやらは、果たしてそんなことができるのか？）

彼の頭の中には『疑惑』の二文字しかなかった。

アラスク山の森の中、二人の男が向かいあっていた。

一人は鎧を身につけ、両刃の剣を構えるグリア帝国軍、グレン。

対するは鞘、鍔、柄それぞれ黒い刀、黒刀を握りしめて体勢を低くしグレンを凝視する男、クロイド。

風が吹く。木の葉が舞う。クロイドの結わえた長い黒髪が僅かに揺れる――。

「……どうした？なぜ、かかってこない」

グレンは剣を構えたまま言う。

クロイドからは何も返事が返ってこない。

「死を恐れているわけではないだろう。ではなんだ？なぜ向かってこない」

「・・・・・・」

「……もういい。来ないなら、こちらから行かせてもらう！！」

そう言うとグレンはクロイドの元へ一気に駆けていく。

相手が向かってきたというのにクロイドは微動だにしない。

どんどん両者の間は縮まっていく。

そして、グレンの剣がクロイドに向かって斬りかかる――！

「はぁあああ！！」

「っ！！」

キィン！！――……

金属音が鳴り響く。それは剣の刃と黒刀を鞘に納めたままの状態のものがぶつかってなった音だった。

「！！！？」

抜刀されていない状態のままで攻撃を防がれたグレンは驚く。そして、そのクロイドの態度にグレンは激怒する。

「……貴様、俺を馬鹿にしているのか！！」

「くっ……」

「さぁ、早くその不気味な刀を抜刀してみろ。手加減など一切……無用だ！！」

そう言ってグレンは思い切り右足でクロイドの左わき腹に目掛けて見事な回し蹴りを浴びせる。

「ぐっ――」

その衝撃に絶えられず蹴られた方向へ飛ばされるが、地面に叩きつけられる前にクロイドは空中で一回転し無事、着地する。

「さぁ、やるからには全力で来い」

そう言ってグレンは剣を構えたまま、クロイドの元へ一直線に向かう。

体勢を立て直し、向かってくるグレンに対しクロイドは刀を抜刀しようとはせずにそのままグレンの元へと走る――。

剣と鞘に納めたままの黒刀がぶつかる。

「貴様、……未だに俺をなめているのか！！　ふざけるな！！」

グレンは未だに抜刀しようとはしないクロイドに向かって剣を振るいながらも、激怒する。

「――……するな……」

「何？」

「勘違いするな。俺は別にあんたと闘り合うつもりはない」

「なんだと……？　俺をまだ戦う相手として見ていないのか、貴様は！！」

「そうじゃない」

対するクロイドもグレンの攻撃を納刀したままの黒刀でかわしながら言う。

「あんたには、守りたい人達がいるんだろ？　あんたを殺したらあんたが守りたいと思う人々はどうなる？　あんたの代わりになるような奴を俺は知らんが……」

「――知った風に言うな！！　貴様に何が分かる！！　国を滅ぼされ、陛下を守れずにただ敵国の駒としていいように扱われる気持ちなんぞ、貴様に分かるはずが無い！！」

「……確かにな」

刀と剣がぶつかり合い、お互い押し合った状態へと流れる。

クロイドは溜め息をつき、そして言う。

「でもな、そんな立場にたったことなんてないけどな、あんたと俺の立場は少し似てんだよ」

グレンの言葉を待たずに、続けるクロイド。

「俺には守りたい人がいる。そいつは知識が無くて寝相が悪くてわがままでだらしない――けどな、そんな奴だからこそ、守りたい……って思ったのかもな」

「……なるほど、な。君にも守りたい人がいるのは分かった」

少し落ち着いたようで、穏やかな口調に戻るグレン。

「……だがな……、例え君に守りたい人がいて俺にも守りたい人がいる――そうであったとしても――この戦いは……やめられない！」

そう言うとさっきまで剣と刀が押し合ったままの状態から一転し、グレンが剣を上部へ力尽くに上げてクロイドの構えを崩す。

その行動を全く読めていなかったクロイドは思惑通り、黒刀を持っていた両手全体が上部へ勢いよく上がってしまう。

「！！？、しまっ――」

クロイドの顔に焦りが見えた。

「これで、終わりだ！！」

その隙にグレンは持っていた自分の剣を勢いよくクロイドに向けて斬りかかる――！

アラスク山の山中、風が吹き、山の木々の枝が微かに揺れていた――。

第十章　互いの意志（後書き）

～お知らせ～

第一章の部分に付け加える予定がありますので、付け加えたらまた後日連絡するので楽しみにしていてください♪

第十一章　夜（前書き）

第一章に世界観を書き加えました。よろしければ、見ていって下さい♪

第十一章　夜

その日の夜。アラスク山の森の中――

焚き火の炎と向き合った状態で座っている男が一人、いた。

男の表情はどこか暗かった。

パチッ、パチッ、と音をたてながら燃えていく炎をただ虚ろな目で見て――いや、ただ眺めているだけのようだった。

「はぁ……」

ふと、溜め息が出てしまった。

風が冷たい。風は男の体温を少しづつ奪っていくようだった。

「なんでこうなってしまったんだろうな……俺が……こんなことになっているのを知っていれば――俺の生き方もかわっていたんだろう――な……」

独り言のように呟く。

後悔していた。この男、グレン・ハーゲンは。

自分がもっと早くに気付いていれば、今よりも少しはマシな方向へと流れていっていたのかもしれなかった。ただ、グレンは後悔する。

「見苦しい」

グレンの後方にあるたくさんの木々の暗闇の中から、突然男の声が聞こえた。

「見苦しい。今はそんな下らない後悔より今後の対策をしたほうがいいんじゃねぇか？　あんたがいくら悔やんだところでこの状況がよくなるわけじゃねぇのはわかってんだろ？　……俺はこんな男に一本取られたのかと思うと虫酸が走る」

そういって森の暗闇の中、一人の男が姿を見せた。

男が身にまとっている黒い服装が、暗闇の中に溶け込んでいて、いつからいたのかと不思議に思わせていた。

「対策――か……」

グレンはその言葉を復唱する。

「では、どうするんだ？」

「……今、考えてる。あんたも人任せにしてないで考えろ」

男は頭を掻きながら答えた。

グレンはその様子を見て、そして自分も考える素振りを見せながら思考する。

どうすればいいのか――

どうやればいいのか――

自分に何ができるのか――

そして――どうしたら――……

そんな風にグレンは考えていると、今更ながら気がついたことがあった。

「なぁ」

「あぁ？」

男は物事を考えているときに水を差すようなマネをされたので不機嫌な口調で答えた。

「今更……なんだが、その……君の名は――なんと言うのだ？」

その問いは今更過ぎた。

そんなことを言われた男は深く溜め息をついて言った。

「今更すぎるな。だいたい、名前も知らないで俺を殺すつもりだったのか。それは騎士道としてどうかと思うぜ」

「ああ――君の言うとおり……だな」

グレンは申し訳ないと言わんばかりの顔を見せていた。

その様子をしばらく見て、男は頭を掻きながら面倒くさそうに答えた。

「クロイドだ」

……

……

……

…

今から何時間も前のことである。

この時はまだ太陽は沈んでおらず、クロイドとグレンの戦いに決着がついた――と思われた瞬間まで遡る。

「テメェ……どういうつもりだ」

そう言ったのはグレンではなくクロイドだった。

そして、その言葉はグレンに対してではなく、グレンの剣を片手に装備してある刃で止めグレンとクロイドの間に立つ一人の男に向けて言った言葉だった。

「すまんな……我とて、都合というものがある。お主が今ここで死んでしまっては哀れだと思った――ということだ」

男は顔に仮面をつけていて表情は読めない。

この男はグレンの剣がクロイドに当たる前のほんの一瞬に突然現れて、両者の間に立っていたのだった。

二人は一旦武器を下ろす。

そして、グレンは驚きながらも仮面の男に向かって言う。

「貴様……何故邪魔をする……？　貴様の都合とは何だ？」

「誤解するでない、グレン殿。我とて雇い主様方の契約違反をしてはいるがこれも我の都合上仕方が無いこと。決して、この男の仲間とかではない」

そう言う仮面の男。

「じゃあ、どういうつもりだ？　俺を単に助けたかった、というわけじゃない。だったらなんでこんなことをした？」

今度はクロイドが言う。

「ただ――お主が知らないまま死んでしまっては哀れだと思ったからでな」

「はぁ？」

「あれを見てみろ」

そういうとクロイドの後方より高い方向に指差す。

「あれ？」

振り返るクロイド。その瞬間、彼は驚愕した。

そこにいたのは三人の男女。

二人はグリアの鎧を身につけている単なる一般の兵。

そして、あとの一人が二人のグリア兵に後ろに組んでいる腕を掴まれた状態で目は閉じたままで立っている女が一人、セフィリアがいた。

「なっ、せ、セフィリア！？」

「ひ、姫様！？」

ほぼ同時にクロイドとグレンは叫ぶ。

「貴様！　これは一体どういうつもりだ！」

クロイドは男に向かって怒声を放つ。

「こういうことだ。何も隠してはいない。ありのままの現実だ。それがどうかしたか？」

男は単調に答えた。

「テメェ！！」

「貴様！！」

同時に叫び、手に持ったそれぞれの武器、剣と刀で仮面の男に斬りかかる――が、その二人の攻撃も意図も簡単に片手でそれぞれ攻撃を防ぐ。

「やめておけ。これ以上の敵対行為はそこのお姫様がどうなっても良い――ととらせてもらうぞ？」

しばらくして、二人とも武器を鞘に納めた。

「……セフィリアを……どうするつもりだ……？」

クロイドが言った。

「さっきの質問とあまり変わってはいないようだが……まぁ、彼女の今後についてはお主に教えてやろう。この者は二日後、元オスティア領の町オストンで公開処刑を行うつもりだ」

「そんなこと俺は知らない！　これはどういうことだ！！」

今度はグレンが男に向かって怒声を放つ。

「当たり前だ。我は雇い主様方に秘密裏に行うようにと言われていたからな。そなた、グレン殿が知るはずもなかろう」

「　　――――！！」

声にもならない声を叫ぶグレン。

「……で、俺にどうしろと？　秘密裏に行っていたのをわざわざ俺にばらすことに何の意味があるんだ？　お前は契約違反してまで一

体何がしたかったんだ？」

今度はクロイドが言う。

「別に……我はお主が哀れだと思っただけだ。それ以外何か思うところでもあるのか？」

「あっそ」

そう言い、今度は男に向かって呟いた。

「覚えてろよ。テメェをぶっ潰して必ず取り戻すからな。アイツもあんたが今も持っている――それをな」

男は苦笑し、こう答えた。

「楽しみにしておこう」

……

……

…以上回想終わり。

二人はその後この山で今後の対策を練っていた――のだが……――

「悪いが、俺には何も手出しすることはできない」

グレンは言った。

「さっきも言ったが、俺には守るべき人たちがいる。帝国に捕われているオスティアの民達のため……俺には何もできない」

「たとえ……それが一国のお姫様だろうと？」

クロイドにそう言われ、歯を食いしばり苦痛な表情を浮かべる。

「どうすることも出来ない。俺が手を出したところでグリアの奴らは何百、何千といった民を殺すだろう……人の命とは天秤にかけることが出来ないというのに……どうしてだろうな……。こういうときだから考えてしまう。どちらを選べばいいだろう？　どちらを選べば得になるだろう？　どちらを捨てれば――いいのだろう……てな」

「　　――んなよ……」

クロイドは何かを言った。

「ふざけんな！！」

もう一度、今度は大声でクロイドは怒鳴った。

「どっちを選べば得になる？　どっちを捨てればいいか？　ふざけんのもいい加減にしろ！！　どうしてあんたはそうなんだ。消去法でかんがえてんじゃねぇよ。どうしてどちらとも選んで守ろうって考えねぇんだよ」

「そんなの……無理だろ」

グレンは答える。

その言葉を聞き、クロイドはグレンの元へ歩き襟の辺りを掴み怒鳴る。

「やる前からあきらめてんじゃねえよ！！　テメェ自身が守りたかった人がまだ生きてんだろが！！　テメェはどうしたいんだよ、何がしたいんだよ！！　言ってみやがれ！！」

そう言ってグレンを突き放す。

「俺が……したい……こと？」

そう言われ考えるグレン。

「……考えがまとまったようだな」

「ああ、決まった。姫様のことは――君に任せる」

「ああ、それなら任せとけ……って、はぁ！！？　あんた、どう考えたらそうなるんだよ！？」

「確かに俺は姫様を救いたい――けど、俺が裏切ったことであいつらはオスティアの民を見せしめに殺すだろう」

「だから、お姫様を見捨てると？」

グレンは首を横に振る。

「そうじゃない。俺では出来ないから、クロイド。君に頼んでいるんだ」

「……」

「それに君がオスティアが滅んだ後も、しっかり守ってくれていたみたいだしとりあえず信用している。だから、姫様のことは君に任せる。いいな？」

「……分からないぞ。俺が裏切るかもしれないし」

グレンは苦笑する。

「そんなことにはならない。君は今まで守っていて、いきなり裏切るなんて意味の分からないことをする奴ではないだろう。だから――」

グレンは少し間を置いて言った。

「君にセフィリア姫を救い出してほしい」

洞窟の中、何百もの剣が地に壁に天井に突き刺さっている広い間に、仮面の男がいた。

「久しいな。ここは相変わらずか。……さて、あやつが真実にたどり着いたらどう思うか……楽しみではあるな」

仮面の男はそう呟くと、一瞬にしてその場から消えてしまった。

第十二章　獄中（前書き）

今回は話の繋ぎの部分です。

第十二章　獄中

いつもの庭園。

「……遅い」

どれぐらい経ったのだろう。彼は未だにこの庭園に姿を見せない。

どうしたのだろう。約束の時間は過ぎているのに。

それから、辛抱強く待つこと数分後……。

一人の少年がこちらに向かって走ってきた。

少年はここまできて足を止め胸の辺りを押さえながら言った。

「ひ、姫様、もうし、わけ、ありません――すこし、父上に呼ばれて、いたので、だいぶ――遅くなって、しまいました――」

ぜーっぜーっと息を切らしながら、ウィルは言った。

「ハーゲン将軍より、位の高い私の方を優先すべきじゃないかしら？　それについ三日前のことを忘れたの？　ウィル？」

「へっ？……あ！　あああああああああ！！　す、すみません！！　忘れていました！　え、えーっと、セフィリア…様……？」

「なんで私に聞くの……。それに様付けも禁止したはず。分かって

いるの？」

「あ、す、すみません。え、えーっと、せ、せっ、せせせせせ、セフィリア」

「……」

「……あのー、……セフィリア様？」

「……あなたって人は、三日も経ったっていうのにどうしてなれないの？」

「え？　あっ、すみま――」

ウィルの唇に人差し指を当てるセフィリア。当然ウィルが言おうとした言葉を遮ってしまった。

「そこは『ごめん』でいいの。私達、友達なんだから敬語は必要ないの」

そっと、ウィルの唇から指を離すセフィリア。ウィルはその動作をただ茫然と眺めている形になる。

その硬直状態がしばらく続き、セフィリアは不思議に思った。

「ウィル……？」

そう問われても、頬を赤めたままの少年はただ固まっているだけだった。

「ちょっと、ウィル、どうしたの！？」

手を目の辺りにひらひらと振る。数秒後、ハッと我に返ったウィル。

「どうしたの？　顔が赤くなってるし」

「あ、い、いえ、そ、その……、な、何でもないです！　大丈夫です！！」

「そう？　でも顔が赤いみたい……風邪にでも引いたの？」

「へっ？　……ああ、そうみたいで――じゃなかった。そうみたい。うん、じゃあ、今日はここまで、えーっと、そ、そういえば、兄さんに呼ばれていたんだった。こ、これはいけない。そ、それでは！」

慌てながらそう言うとウィルは走り去ってしまった。

二人の会話は五分ももたずに終わった。

「……へんなウィル」

そう呟いた、八年前のある日の出来事――……

「ん――」

目を開けた。ぼんやりと視界が目に映る。

まだ寝ぼけているのかセフィリアは体を動かそうとする。

「ん……？　あ、あれ？」

手首に何かで縛られているようだった。後ろに縛られているので彼女自身その何かが全く分からない。

「えっ？　えええっ！！？　ちょ、これどういうこと！？　ええっ！！？」

どうやら完全に目が覚めたようだった。

そんな彼女セフィリアが今現在いる場所は石で詰まれて出来た部屋。そこは――

「なんで私、牢屋にいるの！？　クロイド！　どこ！？　私を売ったわね！！？　えらそうなこと言っといてこんなのって酷すぎない！！？」

状況がいまいち理解できず、混乱するセフィリア。

「チッ、うるせーなぁ。ちったぁだまっててくんねーかなぁ」

木で出来た扉の向こうから声が聞こえた。その声に聞き覚えはなかった。

「ちょっと！　これは一体どういうことなの！？　あなたは一体何者！？　長髪黒髪無愛想男どこにいるか知らない！？　お腹すいた！　豪華な朝食を寄越しなさい！！」

「……だから喧しい。それにいくつも質問をするな、耳が痛くなる。それに質問に答えるなら俺はグリアの一般兵で、そんな男知らないし、それに今はもう……昼だ」

随分と優しい一般兵だった。

そんな優しさを無視するかのように（実際無視をしている）言葉を続ける。

「グリアの一般兵！？　私より位がずっと低いじゃない！　口には気を付けなさいよ！！　昼？　だったら昼食寄越しなさい、今すぐに！！」

「こいつほんとに王女なのか……？」

溜め息とともにそう呟く一人のグリア兵だった。

グリア帝国、グリア城――

扉からノックする音が聞こえる。

「入りたまえ」

グリア帝王は向こう側の者へ言う。

扉が開き、一人の男が入る。

「……お前か。例の件、どうなっている？」

「現在オスティア王女セフィリア姫は牢屋に閉じ込めている」

仮面の男は答えた。

「そうか、……で、グレンはどうした？」

「グレン殿とは、アラスク山にて別離した。……何か問題でもあったか？」

「別に問題なぞない。処刑はお前に任せる。翌日、オストンの多く

の人の面前で死に顔でも晒してやれ」

「御意」

そう言うと、男はその場から消えた。

「全く、相変わらず不気味な奴だ。まぁこちらに加勢してくれているんだったら問題はないか……」

そう言うと不敵な笑みを浮かべていた男。

片手に白く美しく光る白銀の刃が柄と鞘の間から見える刀を持ちながら・・・・・・。

第十三章　処刑日　（前書き）

なんとか今年中に間に合わせる事が出来ました（汗

第十三章　処刑日

翌日、太陽が昇りきった朝と昼の中間ぐらいの時間。
オスティア領、オストン。
町の広場にたくさんの人集りが出来ていた。

「これは一体なんの集まりだ？」
人集りの中の一人の青年が言う。
「何ってこれは公開処刑だとよ」
近くにいた白髪交じりの親切そうな男が言った。
「公開処刑？　一体誰が処刑されるんですか？」
「なんでも、オスティア王女セフィリア様だと」
「セフィリア様だって！！！？」
青年は思わず叫んでしまった。
近くにいた人たちも思わず振り返ってしまう。その様子に青年はすみませんと頭を下げながら謝る。

「でも、一体どういうことなんですか？　セフィリア様が生きていたなんて……」

さっきの出来事から学び、青年は声を潜めながら聞いた。

「なんでも国を出て、一人生き残っていたらしい。……全く酷いもんだよ。父君を殺されて、せっかくここまで生きて来れたのに……悲惨だよなぁ」

そう言いながら人集りの中心にある処刑台の方を眺めた。

木製の絞首台。

梯子を上って台にたどり着き、輪の形にした縄を首に通して、床を開いて足がつかない状態にして、処刑者は宙吊りの状態となり、人々の目に晒され、ゆっくりと、苦しみながら、窒息死する。

「……こんなの……許せませんよ……」

「ああ、私もだ」

しかし。

そんなことを考えたところで彼ら、オストンの者達には何も出来ない。周りにいる多くのグリア兵、全員が武装しており、その数およそ二百。オストンのいたるところに散らばっている。また、この処刑台以外のところにも多くのグリア兵が散らばっていた。まともな武具を持ち合わせていない者達が力を合わせた所で何も出来ないのが現状だった。

それからしばらくして。

「これより、オスティア王女セフィリア姫の公開処刑を始める！」

一人のグリア兵が辺りにいる民衆に向かって叫ぶ。

絞首台より離れたところから何十人ものグリア兵が向かってきた。その多くのグリア兵に囲まれながら、オスティア王女セフィリアはいた。

「姫様じゃ！！」
「本当だっ！セフィリア様だっ！！」
「セフィリア様っ！！」
「セフィリアさまっ！！」
「セフィリア様っ！！」
「セフィリア様〜！！」

セフィリアに向かって何人、何十人の人が声を掛ける。悲痛な面持ちで、大きな声を発していた。

しかし、セフィリアはその様子を横目で眺めるだけだった。それ以前に彼女にはその様子より、気がかりなことがあった。

それは、今から数時間も前のこと――

牢屋の室内で薄い毛布一枚に包まって眠っていた。

すぴ～

「……きろ」

すぴ～～

「おきろ」

すぴ～～～

「……おきろ」

スコン。……ぁぅ……すぴ～～

「……」

ガンッ！！

「うぎゃっ！？」

頭部に衝撃が走った。セフィリアはその衝撃によって跳び起きる。

「な、なにっ！？　敵襲！！？」

辺りをキョロキョロと見回す。寝起きであたりがぼんやりとしていたが時間が経つにつれて、はっきりと理解できた。

彼女の前にクロイドが立っていた。

「よく眠れていたか？」

「……」

「ん？　まだ寝ぼけてんのか？」

「……んたねぇ……」

「？」

「あんた……今までどこにいたのよ！！」

バチィィン――と大きな音が室内に響き渡る。

クロイドの左頬にセフィリアの右手のひらのビンタが炸裂した。避けないで主のビンタを素直に受けたクロイドは従者としてはいい態度であったが、ビンタを食らってもなお瞬きすらせずじっとしていた――というのは人間的にどうかと思える。

「……怒りは収まったか？」

平然と毅然たる態度を見せるクロイド。

「収まらないわよっ！！」

「……まぁいい。相変わらずで何よりだ。とりあえず座って話そうか」

そう言い、クロイドはその場で胡坐をかく。

「あんたの部屋じゃないわよ」

かといってセフィリアの部屋でもない。

二人は互いに向き合いながら座った。

「さて、さっそくで悪いが手短に言わせてもらおう。……お前、明日死ぬ」

バチィィン！！

セフィリアはまたクロイドの左頬にビンタする。

「どういうことよっ！！？」

「まぁ、待て。今説明する」

そう言いながら平然と続ける。

「とりあえず、この件は俺の想定外だった。謝ろう。――で、話の続きなんだ――」

バチィィン！！

「謝りなさいよ！！」

「いや、そんな時間今はどこにもない。とりあえず聞いてろ。――とりあえず、この時間帯に助け出そうと思ってきたんだが、如何せん敵の数が予想より多くてな。お前を連れて行きながらだと辛い。よって、明日、……いや、今日か？　……まぁいい。とりあえず、昼間に助け出すことにした」

「もっと早くに出来なかったの？」

「いや、昨日来たんだが――」

またもや、セフィリアはビンタしようとしたが当たる寸前にクロイドは手首を掴んでギリギリのところで止めた。

「――お前の大きな寝言が聞こえて、近くの兵にバレて引き上げてきた」

「そ、そんなわけないっ！！」

クロイドは掴んでいたセフィリアの手首を離す。

「ん？　私が言うのもなんだけど、こんなに騒いでてなんで兵士が来ないの？」

「ああ。それはさっきあらかた片付けておいたからな。でも、交代の兵士がすぐに来るだろうから、俺はここから離れる」

「本当に……大丈夫なんでしょうね？」

「ああ、うまくいけば成功する。……神様にでも祈ってろ」

「なにその態度っ！？　あなた何様のつもりっ！！？　というか、うまくいかなかったらどうなるのよっ！！？」

「……明日はいい天気になりそうだ……」

セフィリアから顔をそらすクロイド。

「答えなさいよっ！！？　っわぁっ！！　っとととととっ！！？」

セフィリアは五度目のビンタをしようとしたが、クロイドはそれをかわしたため前のめりになり顔面から勢いよく床に激突した。

「……いった～い……」

クロイドはそんなセフィリアに構わず入ってきた天井に向かって跳躍し、牢屋から脱出する。

「じゃあ、また明日、絞首台で会おうな」

「笑えない冗談はやめてくれるっ！！？」

そして、現在――

セフィリアは手錠をされたまま、二人のグリア兵に腕を掴まれながら絞首台に上らされる。二人の兵は慣れた手つきでセフィリアの首に輪の形をした縄を巻きつける。

セフィリアは一切抵抗をしない。

「くくく」

近くにいる兵士の笑い声が耳元で聞こえた。

「残念だったな、王女様。あんたはこれで終わりだ。どんな気分だ？　これから死ぬってのに表情一つ変えないで。命乞いのひとつやふたつぐらいしたらどうなんだ？」

セフィリアに向かって呟く兵士。だが、セフィリアは何も答えない。

「チッ、……まぁいい。どうせあんたはここで死ぬんだ。首を絞められて、もがき苦しみながら、大勢の人に見られながらあの世に逝くんだからなぁ」

「おい！　そこ、何を言ってる！！」

他のグリア兵が怒鳴る。

「いえいえ、別に」

そう言うとセフィリアの元から離れていく。

「姫様〜〜」

「セフィリア様ー！！」
「おうじょさまーっ！！！」
「セフィリア様ぁ！！」

老若男女、その場にいる民は悲痛な声で次々に声を発する。

「ええいっ、黙らんかっ！！」

一人のグリア兵が鞘から剣を抜き、民衆に向かって威嚇する。しかし、それでも民衆の声は止まなかった。

「……」

金髪の少年が建物の上から、弓を引きながら狙いを定めていた。

「……っはぁ」

少年は溜め息に近いような息を出して、弦を緩める。

「大丈夫ですか？　若」

少年の後ろにいる一人の黒い髪の少女が声をかける。少年はその言葉に溜め息交じりで答えた。

「……若はやめろって言っただろ？　シェイラ」

シェイラと呼ばれた少女は言う。

「しかし、いくつになっても若は若です」

「お前、何年から俺と一緒にいるんだよ。七年だぞ、七年。それに俺この年で１８になるんだからいい加減やめてもらいたいんだけど」

「ではなんとお呼びになればよろしいのですか？」

「あ？　普通に名前でよびゃーいいんじゃんかぁっ」

そう言いながらもまた矢をつがえ、弓の弦を引っ張る。

「それは無理です。私のような従者にそのようなことは出来ません」

「ああ？　別にかまわねーって。名前ぐらいどーだっていいだろ、つーか、さっきも言ったんだけど、七年も一緒なんだから別にそんぐれぇかまわねぇって」

やっぱりここからじゃきついかな？などと呟きながら少年は狙いを定めようとする。

「し、しかし――」

それでもなお続けようとするシェイラに向かって弓を構えたまま少年は言う。

「それとも何か。主君の命に背くってか？　シェイラ」

「……承知いたしました」

その言葉が決定的に決まったようだった。

「アルベルト様」

そう本名を言われた少年、アルベルトはうれしそうに言う。

「おっ、何だちゃんと本名で呼んでくれるじゃんか。でも『様』は余計だな。とっぱらっちまえ」

「それだけは出来ません。たとえアルベルト様がそれを私に命令しようとも私は応じません。むしろここで自害します」

「そんなことで、そこまで壮絶なことをしちまうのか、お前は……」

「アルベルト様にとってそのようなことでも私にとっては重要なことなのです」

「……あっそ。わかったよ。……にっしても、あれだな、シェイラ」

弓を引いたままで後ろにいるシェイラに向かって言うアルベルト。

「はい」

「弓ってもんはこんなにつかいづれぇもんだったのか」

「はい？」

「……いや、あれよ。あの男が言うから来てみれば、本当にオスティア王女様の処刑が行われるってんだから驚きだよな～」

シェイラに疑問形の返事をされたアルベルトは唐突に話題を変えた。

「……全くです。あの男何者なんですかね」

それに対して、話題を変えられたことに特に変わった様子を見せず、何の反応を見せずに答えるシェイラ。

「俺が思うにあの男ただもんじゃねーな」

ほんの一瞬、間をあけて言う。

「あれは、人間じゃねぇ。なんかバケモンみてぇだったぞ」

「なぜ、そう思うのですか」

「勘だよ、勘。……ああもう、まだかよ、あいつ。いい加減疲れてきたんだけどな。　グリアの奴らなんかとっとと制裁を喰らわすべきじゃないか、なぁ、シェイラ？」

「全くもってその通りです、アルベルト様」

「時間だっ！」

一人のグリア兵が言うと、二人のグリア兵が絞首台の上に上がりセフィリアの元へ近寄る。

「さぁ、王女よ。何か言い残すことはあるか？」

一人の男がセフィリアに向かって言う。セフィリアは今まで無言を通していたがここでやっと口を開く。

「私はオスティア王女セフィリアです。オスティアが滅亡してまだ日もあまり経たないうちに最後の王族が先に逝くのお許し下さい。本来なら皆さんを導くのが私の務めでしたがそれももはや叶いません。ですが――」

「随分と姫様らしいことを言えるなぁ。セフィリア王女って」

そう呟くアルベルト。

「何をおっしゃっているんですか。姫様だから言えるんです。それに、アルベルト様も一国の王子ですよ」

隣で絞首台の辺りの様子を眺めながらシェイラは言う。

「そうだったな。……さて、たぶんそろそろだろ。皆はちゃんと待機してっか？」

弓の弦を緩ませて、立ち上がるアルベルト。

「はい。すでにこの町は我々の軍が包囲しております。アルベルト様の命令一つですぐにでも動かせます」

「上出来だ」

「――決してあきらめないで下さい。……以上です……」

そう語り終えたセフィリア。

近くで話を聞いていた人々の目からは涙が流れていた。ところどころから泣き声が聞こえている。

「では、やれ」

そう一人のグリア兵に言った刹那。

勢いよく何かが跳んできたかと思えば、それはセフィリアの首に巻かれていた縄にあたり、縄が切れる。それとほぼ同時に一人の男が民衆の真上を勢いよく飛び越えて、辺りの者が気がついたときには

絞首台の上でセフィリアを胸のあたりで両手を使って抱えている一人の長い黒髪の男が立っていた。

「よかったな」

「へっ？」

まだ状況がよく読めていないセフィリアに向かってクロイドは言った。

「天気が晴れていて」

この日は運が良いのか悪いのか、天気は雲ひとつない快晴だった。

第十三章　処刑日　（後書き）

次回ももしかしたらこれぐらい、またはもっとかかるかもしれません（汗

第十四章　代行人たちの裁き

オストンでセフィリアの処刑が行われている時。

同刻、アルハナ王国――バルゼット砦――

ここはアルハナ王国の堅牢なる要塞で、過去の戦ではどの国もここを落とすことは出来なかった。
そんな砦より遠くに離れたところでグリア軍は陣をはっていた……。

「さすがはアルハナ王国。そう簡単には突破できないな」

かれこれ約一週間ほど、ここバルゼット砦を攻めているガネッドの軍隊であったが、この砦を崩せないでいた。

「ガネッド将軍！　一体我らはいつまでここを攻めなければならないのですか？」

一人の兵士がガネッドの元に来て進言する。

「あの砦を攻略するまでだ」

「しかし、一向に崩せる気配がないではありませんか！　兵達の士気がどんどん下がってゆくばかり、ここは一旦引くべきではありませんか！！」

「これは陛下の命令だ。私がどうこう指図できる問題ではない」

「し、しかし――」

「聞こえなかったのか？　これは陛下自ら望んでいることだ。我々が口答えできる権利なぞどこにもない！！」

それ以降その兵士は黙って、その場から離れていった。

（もう後には引けん。全て物事が赴くまま、身を任せることしか私には出来ないのか……）

そう思うガネッドはじっと目の前に大きく聳え立つバルゼット砦を眺めていた。

「貴様か！　セフィリア王女に力を貸している剣士というのは！！」

一人のグリア兵がクロイドに向かって言う。

「だったらどうする？」

面倒臭そうに答えるクロイド。胸の辺りでセフィリアを抱えながら。

「皆の者！！　直ちにこの者達をとらえ――」

最後まで言い終える前に突然、どこからともなく降ってきた矢がそ

のグリア兵の首の辺りに――貫通する。首と口から血を噴出し、兵士はそのまま勢いよく倒れる。

「「きゃあああああああああああああああああああああああああああああっ！！」」

「「う、うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ」」

民衆の中にいた何人かが悲鳴をあげ、それと同時に人々は右往左往散り散りになって逃げ去っていく。

「くそっ！！　どこからだ。どこから矢が飛んできたんだ！！」

グリア兵達は混乱しながらも、辺りを見回す。そして今度は上空からさらに何十、何百本もの矢の雨が絞首台の辺りに降り注ぐ。

「ぐあっ！！？」

「ぎゃっ！！」

「ぐはっ！！」

「あああああっ！！」

悲鳴を上げながら降り注ぐ矢に突き刺さりながら、死んでいくグリア兵。

「ええいいっ！！　どこだ！　どこから矢が放たれている！！」

「あっ！！？」

一人のグリア兵が驚いたように大声を出す。

「どうしたっ！？」

「せ、セフィリア姫がいません！！　それにさっきの男もどこにも見当たりませんっ！！」

辺りにいたグリア兵は一斉に絞首台の方に視線を送る。確かに絞首台にはセフィリアとクロイドの姿がなかった。

「ええぇい、くそっ！　探せ！　そう遠くには行っていないはずだ！！」

そしてグリア兵は散り散りになって探索しようとしたその時。

彼らの目の前にはいつの間にか、一人の少年が立っていた。背中に少年の身体より大きな剣――大剣――を背負いながら。

「何者だ！」

少年は口元を緩ませて、微笑する。

「なんだぁ、あんたら俺のことを知らないってのか？　お前ら下々の奴らは俺の正体をしらねぇってか。じゃあ折角だ。特別に教えてやるよ。耳の穴かっぽじってよく聞いてろよ」

そう言って少し間を置いてさっきよりも声を張り上げてる。

「俺はコーデリア第一王子アルベルト・セルナ・ヴァンディッヒだ」

「！！！、コーデリアだと！？」

グリア兵の顔には一気に焦りを感じているようだった。それとほぼ同時になにやら遠くから喚声と地響きのような音が聞こえてきた。

ドドドドドドドドドドドッ……

そして音はだんだん大きくなる。

ドドドドドドドドドドドドドッ！！

アルベルトの後ろから、たくさんの騎馬兵がこの絞首台――もとい、アルベルト達のところへ向かってくる。それは鎧に十字架の印が刻まれていて――つまり、それらはコーデリアの国旗でありコーデリア兵だった。何百もののコーデリア兵が馬に跨り、こちらに向かってくる。

グリア兵達はあまりの突然な出来事に驚愕する。

「さ～て、グリアの末端兵士諸君らにこれから我がコーデリア、自ら制裁してやるよ。――覚悟しな」

アルベルトはそう言うと近くに死んでいたグリア兵の剣を手に取り構える。

「ひ――ひるむなっ！！　我らがグリアの意地と誇りを異教徒達に見せ付けるのだ！！」

一人が周りの兵達を奮い立たせようと、声を張り上げる。

「はっ！　言ってくれんじゃねぇか。俺らが神の代行人としてテメ

ェらに裁きを加えてやるよ、泣きながら感謝しろよなっ！！」

そう言うと、後ろから来たコーデリアの騎馬兵と共にアルベルトはグリア兵達の元へと向かっていった……

街中で何人もの兵士の喚声が聞こえる。

「……あー、とうとう始まったか」

クロイドは建物の上からコーデリア兵とグリア兵との抗争をじっくりと眺めている。

「ねぇ」

セフィリアはクロイドに向かって問う。

「どうした？」

「一体何がどうなっているの？　町中のいたるところから喚声の声が聞こえるけれど……」

クロイドは町の方を眺めながら言う。

「コーデリア軍が、グリア軍を一掃している」

「コーデリア？」

「ああ。コーデリアの国内にある砦に援軍を頼んでおいてな。それで今彼らが戦っているところだ」

「こんなところで戦ったらここにいるたくさんの住民が危ないじゃない！　今すぐ攻撃をやめて！」

「安心しろ。住民はあらかた全員避難させている。さっきまで観ていた住民も避難させている。だから何も心配するな」

尚も町の様子を眺めながら言うクロイド。

「……本当、なんでしょうね」

「ああ。大丈夫だ。一人残らず――「クロイド殿」」

クロイドの話途中に少女の声が聞こえた。セフィリアが後ろを振り返るとそこには黒髪の少女が一人立っていた。

「あなたは……？」

いきなり現れた少女に向かって聞くセフィリア。

「お初にかかります。オスティア王女セフィリア様。私はコーデリア聖国第一王子、アルベルト・セルナ・ヴァンディッヒ様の側近シェイラと申します」

丁寧に身体を前に九十度ほど折り曲げていう少女――シェイラ。そのままの勢いでクロイドに言う。

「クロイド殿。いくら我が軍の方が数が多いからといってそのまま傍観していることには、私は納得いきません。用事が済んでいるようなのでつきましてはこちらの方に助力していただきたいのですが」

「ああ。わかって――」

話の途中で突然、クロイドが黙った。

「クロイド？」

「クロイド殿？　どうかされましたか？」

「……すまない。やるべきことができた。シェイラ……といったか。セフィリアを安全な場所に連れていってくれないか」

しばらく黙っていたクロイドが口を開いた。しかし、相変わらず背中を向けたままでこちらに顔を見せない。

「やるべきこと？　それはなんですか？　コーデリアに力を貸す以外に何が――」

「すまない」

「……分かりました。ではセフィリア様。こちらへ」

そう言ってシェイラはセフィリアを連れてこの場から離れる。

「クロイド？　どうしたの？　一体なにがあったの？」

心配そうにクロイドに声をかけるセフィリアだったが、結局クロイドは何も言わなかった。

「……」

喚声が聞こえる。兵士の声。剣の刃と刃がぶつかり合う音。戦場の町並み。

「……」

クロイドはしばらく、その風景を眺め、目を閉じる。

「……」

「さっさと出てきたらどうなんだ。そこにいるのは分かってる。姿を見せろ、化物」

「……気付いていたか」

一人の男がクロイドの後ろに立っていた。声を聞いてクロイドは振り返る。

「で、我に何か用か？　追求者？」

その男――仮面の男は言った。クロイドに向かって。

「前回はセフィリアがいたから何もできなかったが、今回は違う。お前を潰して今度こそ失ったものを取り戻す」

「穏やかではないな。まずは話し合いをしようではないか」

「お前はそんな風に事を穏便に済ますような奴じゃないだろ」

「……くくくっ、よく分かっているではないか？　では――」

仮面の男は、両手を広げて、自分の武器を相手に十分に見せつけながら言った。

「始めようか。　我とお主との闘いを」

第十四章　代行人たちの裁き（後書き）

今年初の投降一発目ですw　今度はいつになるか自分でも分かりません……（汗

回想　～当たり前だった日常～

「邪魔だ！」

勢いよくお腹を蹴られ、その方向へと飛ばされる。いつものことだ。日常の一コマ。もう慣れてしまった。

「お前は邪魔だ！　目障りだ！　存在が鬱陶しい！　外見が忌々しい！　その目は、その顔は見ていて不愉快だ！　お前なんかとっとと死んでしまえ！」

踏まれる。踏みにじられる。雑草のように。……いや、これだったら雑草の方がまだマシだ。雑草には痛みを感じることがないからうらやましい。けど人間だ。人間という生き物なんだ。だから感じてしまう。痛みを。痛みは相変わらず慣れない。

踏まれる。踏まれる。踏まれる。踏まれる。踏まれる。踏まれる。

――……

肩を。腰を。膝を。顔を。頭を。背中を。膝を。背中を。顔を。一通り身体全部の部位を。

容赦なく。必要以上に。憎悪の念をこれでもかと送りながら。

――踏まれる。踏みにじられる。

……痛い。

「なんでお前なんかが生きているんだ！　俺はお前が嫌いだ！　憎い！　気持ちが悪い！　吐き気がする！　この家にお前の居場所なんかないんだよ！　この国にお前の居場所なんかないんだよ！　この世界にお前の居場所なんかないんだよ！　この世にお前の居場所なんかないんだよ！　だからとっとと気付いて失せろ！　このクソガキッ！！」

殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。

――……

「くたばっちまえ！　死んでしまえ！　存在ごと滅びてしまえ！

俺はお前が――」

思い切り間を空けて、そしてその言葉は放たれた。

「大嫌いだっ！！！」

ガンッ、と鈍い音が刹那ほど辺りに響いたのと同時に今見えている視界がだんだん薄れていく――。

最後にこの眼は、この両の眼は、一人の女性を映した。

心配そうに影から見る目。

憐憫の目。

哀れみの目。

悲痛な眼。

……。

そんな風に見るのなら。

そんな風に眺めているのなら。

そんなことしかしないのなら。

……なんで

どうして……

どうして……

どうして……

あなたは。

僕を。

この僕を。

こんな僕を。

こんな僕だからこそ。

助けてくれなかったの……

……？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6649i/

黒刀の所有者

2010年10月28日08時11分発行